子濟農、土馬諸部に雄とし、套中の主となり、王に封ぜられむことを求めて、許されざるを以て、四十三年八月、套中諸部を合して、大舉入寇し、官軍之を禦いて敗績す。而かも、その後、侵寇なほ熄まず。

その翌萬曆四十四年は、清の太祖建元天命元年にして、ツングス族の勢威、漸く隆ならむとする時に際せり。明室の衰運は、その一、西北の邊警絶えざりしに在れども、この間、東、朝鮮を救ひ、兵を我が日本に構へ、土馬糧餉を失ひしは、愈よ之を激成せしものなり。次に、朝鮮の興廢より始めて、壬辰の亂に及び、安南、緬甸等、南驅諸邦の起伏を述ぶるに先ち、歐人東漸の沿革と耶蘇教の傳播とに就いて略述するところあるを得む。

東西交通の沿革

第二十三章　歐人の東漸

はじめ、蒙古の盛なるや、その遼曠の版圖は、歐亞の二大洲を跨り、東亞の交通、大に便宜を增し、從つて歳に月に頻繁を加へ、黑海沿岸のクリミヤ・コンスタンチノープル等は、重要なる貿易場となりしが、元室の滅亡とともに、漸く衰頽に赴き、加ふるに、十四世紀の初、回教徒の一派、突厥の餘種なるオスマン、土耳古族國を小亞細亞に興し、順次に東羅馬帝國を蠶食し、千四百五十三年、弦月旗、セント、ソフヒヤの殿上に翻つてより、黑海の航海權は、全く土耳古人の占斷するところとなり、東洋貿易は、大打擊を被るを免れず。

而かも、ひとり土耳古のみならむや、これより先、埃及は、回教を奉ずるの故を以て、歐洲人の需要する東洋貨物に重稅を課し、ゼノア、ベネチア等、伊太利の都市は、商業全く沈滯せり。こゝに於てか、歐洲人の渴望して措かざりし香料絹布の供給は、いつしか、缺乏を告げ、必ず他の方法を案出して、之を救濟するの必要、焦眉の急に迫り、之に加ふるに、蒙古の極盛時代に遠遊せしマルコ、ポーロー、一聯の旅行家は、頻に支那印度地方の富饒にして、遺利多きを說き、又我が日本の殊に金銀珠玉多きことを傳へしを以て、大に歐洲人士の好奇心を動かし、意を東方に注ぐもの、愈よ多く、中世の暗黑時代、漸く終を告げ、一千年間の抑壓、はじめて脫するを得、敢爲冒險の意氣、一時に勃發し、且つ羅針盤の使用法、開けて、航海の安全、保證せらるゝや、多數の歐洲人士は、陸續として、東洋に遠航を試み、就中葡萄牙、西班牙、荷蘭、英、

吉利の四國は、その地、海に瀕して、その民、天性航行の術に長ぜしが故に先づ鞭を此に着くるを得たり。

葡萄牙の支那貿易

十五世紀の後半、ジョン二世の葡萄牙に主たるや、大に遠洋航海を奬勵せしを以て、千四百八十六年、バルトロミユー、ヂアズは、亞弗利加の南端に喜望峰を發見し、十一年の後、千四百九十七年、ワスコダガマは、その岬角を廻航し、その翌年を以てはじめて、印度のマラバルに着し、新航路を發見し、これより、東航の客、頻々として、新領土を拓開せむことを力め、千五百十年(明の武宗正德五年)には、印度總督アルマエダ、ゴアの地を占領し、之を以て、東印度所領地の首府となし、葡國の東洋貿易、益す隆盛に赴くや、東洋のベネチアの異稱あるに至れりとゝに於て、次第に錫蘭及び印度東海岸に商館を建て、尋いで、滿剌加、爪哇を奪ひ、數ば土人と戰ひしが、結局は、その勝利に歸し、亞細亞南岸に於ける歐人の勢力は、漸を以て廓張せり。歐人の夙志は、ひとり、印度のみならず、支那、日本に通ずるに在り。而して、元の世祖及び明の成祖の南洋を經略せし以來、支那人の南洋に通ずるもの、甚だ多く、その航路は、すでに明かなりしを以て、滿剌加占領の後五年、千五百十六年(正德十一年)葡人ラフハエル、ペレストレロといふもの、ジャンクに乘じて、支那に赴き、その翌年フエルナヲ、ペレス、ダ、アンドラデといふもの、王命を以て、支那港灣測量の爲め、葡船、馬來船各四隻を以て、廣東に來り、三竈島に碇泊することを許されしが、武宗は、葡人を疑ひ、未だ通商を許さず。然れども、その來航するもの、年を逐うて多きを加へ、寧波厦門に商館を建て、嘉靖の末には、阿瑪港を占領して、その根據地となし、高樓巨屋、櫛比するに至れり。

その日本貿易

その後、葡人フエルナム、メンデス、ピント、フランチスコ、ダモダ、クリス、フオロ、ボラルホ等、遐羅を發して、支那に至り、途にして同行者と別れ、海賊の群に投じて、洋中に飄泊せしが、颶風に遇うて、漂流すること二十三日にして、我が種子島西村小浦に泊す。時に西紀千五百四十三年九月二十三日、我が天文十二年(嘉靖二十二年)八月二十五日なりず。てにして、里長の命により、二十七日、赤尾木津に入る。領主時堯出てゝ面接し、葡人の鳥銃を携ふを見、その精利を驚嘆し、家臣をして、その操縱を傳習せしむ。これを日本鐵砲傳來の起原となす。而して、ピント等の寧波に歸着

するや、同地在留の葡人は、我が國の富饒を聞いて、陸續商船を送り、はじめ鹿兒島に於て貿易せしが、七年の後、平戸に移り、その後、大村純忠は、横瀬・福田・長崎の諸港を開きしに因り、十六世紀の初より、凡そ百四十年間、東洋貿易の全權は、殆んど葡人の獨占に係れり。

西班牙人の東洋貿易

喜望峰の廻航に先つて、西班牙は、千四百九十二年、閣龍が亞米利加を發見せし後、しきりに、西半球の新天地を拓開し、西方に航行して、東洋に到達せむことを企て、千五百二十年(正德十五年)マゼランは、亞米利加の南端を經て、太平洋に出で、はじめて、その目的を達し、益す東洋貿易を奬勵し、千五百六十五年(嘉靖四十四年)比律賓群島を占領し、馬尼剌に市街を建てゝ、根據地となし、千五百八十年(萬曆八年)使を支那に送りて、通商の公許を求めしが、在來の葡萄牙商人に妨げられて、要領を得ず。尋いて、我が平戸に商館を開きて、貿易を營み、且つ馬尼剌に於て、支那人と通商をなせり。

李馬奔

西班牙の比律賓占領に就いて、特に附記すべきは、海寇との交戰なりとす。李馬奔といふものあり、廣州の產なり、壯にして、海賊に投じ、その首領となるといふ。もふに、倭寇と連合したる支那海賊の一隊なるべし。その洋中に在るや、馬尼剌歸航のジャンクに遇ひ、之を奪ひ、捕虜を以て導となし、六十二隻のジャンクに海兵二千・陸兵二千・婦女千五百を載せて、比律賓を西人の手より奪はむとし、千五百七十四年十一月二十九日、馬尼剌灣に入り、その部將日本人庄公といふものをして、西人を攻めしむ。時に暴風起り、その舟覆り、二百人を失ふ。庄公、殘兵を以て、上陸し、西軍の敵將を殪す。西人サンチアゴ城に入る。時に援軍至るあり、庄公誤り認めて大兵となし、軍を旋せしが、西人の追擊に遇ひ、血戰數刻、敗卒を收めて復た海に浮び、李馬奔に合し、再び大兵を以て來り、十二月三日、新來の西將ウーアン、サルセドと馬尼剌に戰ふ。庄公、選兵千五百を率ゐて上陸し、火を市街に放ち、三隊に分れて、城堡を圍み、殊死して戰ひ、李馬奔、海上より、礮を發して、その勢を助く。庄公、遂に敵を破り、ひとり、手兵を以て城に入るや、サルセド、衆を合して環攻し、苦戰甚だ勉め、遂に庄公を斃す。李馬奔、五百の手兵を上陸して、之を援けしめしも及ばず。帆を揭げて、遠く去り、呂宋の西海岸に航し、數日にして、アグノ河口に至り、大に西人を破

りたりと揚言して土人を服し、河上四哩の地に城塞を築いて、首都となす。サルセドー、報を得、西人二百五十・土人千六百を以て、之を圍む。李馬奔、しばらく防戰せしも、その遂に敵すべからざるを見るや、一隊を城中に留めて、敵軍を牽制せしめ、間に乘じて、海に遁る。その止まりしもの、後、深山に入り、今のイゴロラ支那人種の祖先となりしといふ。李馬奔敗後、終るところを知らず。後に豐公征韓の擧に先つて、原田孫七郎、呂宋の取るべきを說きしことあり。おもふに、南洋に關する知識は、すでに早く、この種の海賊より傳へしことあるや必せり。

葡人貿易の盛衰

葡萄牙人は、千五百十七年以來、數ば使節を支那に派遣せしも、澳門の貿易を默許されし外は、何等の特權をも與へられず。然れども、澳門の貿易は、百年間、盛に行はれ、葡人は、居然として、東洋貿易の利益を壟斷せり。尋いで、千六百三十九年、我が日本が、長崎出島より全く葡人を驅逐して、その渡來を嚴禁せし後、澳門の貿易、大に影響を被れり。蓋し日本に航せし葡國商船は、皆澳門を經由せしものにして、澳門と長崎とは、殆んど支店及び出張店もしくは代理店の關係あり、我が國の奮に

荷蘭人の東洋貿易

して、謂ゆる南蠻の事を記するもの、必ず天川即ち亞媽港に言及せざるものなきを見ても、その一斑を推及するに足るべし。而して、島原の亂後、德川氏は、耶蘇教の禁を嚴にし、僧侶商賈の別なく、南蠻人を放逐し、その渡來を堅禁せしを以て、澳門の葡人は、有利なる出張店を失ひ、且つ葡萄牙の本國は、この頃、衰微して振はざりしを以て、澳門の末運、挽回するに由なく、最近の條約に由りて、其地の所有權を得しと雖も、剡下の澳門は、依然寂寞、唯だ賭博の盛を以て稱せらるゝに過ぎず。

歐人の支那貿易は、葡萄牙を首とし、西班牙は、未だ此に與らず。而して、葡萄牙に代るものを、荷蘭となす。荷蘭は、もと西班牙の屬國なりしが、宗教上の爭より、千五百八十年、その羈絆を脫し、興國の勢に乘じ、且つ冒險的氣風を愛する國民の特性として、海上の威權を振ひ、千五百九十五年、喜望峰を廻航して、東印度に至り、錫蘭・滿剌加・蘇馬答剌等に於ける西班牙の殖民地を奪ひ、西葡二國の商人を逐ひ、千六百十九年、爪哇にバダヴィア府を建て、東印度荷蘭領地政廳を置き、その後、支那に出入港を得むと欲し、千六百二十二年、十七隻の艦隊を以て、澳門を奪はむとせしが、葡國人及び支那人の爲に擊破せられて、三百人を失ひ、乃ち轉じて、澎湖島に向

臺灣の占領

ひ、居住の支那人を服し、城寨を築いて居る。時に臺灣は、日本海賊の占領するところたり。荷蘭人、地を借りて、日本に至る船舶の寄港地となさむとせしが、日本海賊、己に不利なるを以て、これを許さず。曾て福建の地方官、蘭人澎湖に據りし爲め、甚しき損害を被れるを以て、臺灣に移らむことを勸告す。蓋し臺灣は、當初支那政府の所有に屬せざりしを以てなり。史の記するところに據れば、天啓四年(千六百二十四年)巡撫南居益、朝に請ひ、兵を發して、出て、擊ち、數月に至り、蘭人はじめて帆を揚げて去り、而して、渠帥高文律十二人、高樓に據つて、自ら守り、諸將破つて、之を擒にし、澎湖の警、はじめて息むとあり。その眞僞は、保せずと雖も、明の官吏が、如何に、熱心に、蘭人を澎湖より退かしめむことを願ひしかを知るに足るべし。この時、蘭人は、全く澎湖を去り、日本人を逐うて、臺灣に據る。臺灣の所有權は、日本海賊の手より離れて、當時歐洲の强國たる荷蘭人に屬せり。こゝに於て、蘭人は、ゼーランチャ(安平)城の建築に着手し、六年にして、之を落し、尋いで、プロキデンシア(赤嵌)城を築く。これより先、千六百二十六年、比律賓列島の西班牙太守は、支那貿易を保護せむが爲に、基隆にサン、サルワドル城を築き、同二十九年、淡水にサン、ドミニコ城を築き、殖民地を設けたりしが、千六百四十二年に至り、全く蘭人の逐ふところとなり、全島之に抗するものなし。蘭人の臺灣に於ける、辛苦經營、苟くも怠らず、或は行政を改革し、或は宗教を弘布し、或は土人をして蘭語を學ばしめ、その他、同島の文化を助長せしこと、決して尠しとせず。而して、此頃對岸の支那大陸より、難を避けて、移住するもの、頗る多く、未だ幾ならずして、全島は、明清交替の際、避難者の一隊の奪ふところとなれり。鄭成功、即ち是れなり。その詳は、後に述ぶべし。

寄蘭と清朝との通商

清の世祖の世、バタヴィアの荷蘭太守は、使を北京に派遣して、通商の公許を求めしも、亦た葡萄牙人に妨げられ、要領を得ずして止む。然れども、鄭氏の臺灣を占領するに及び、その國の艦隊は、清軍を助けて、數ば鄭氏の軍を破りしを以て、臺灣は、その後、清國の版圖に入り、荷蘭の所有權は、回復されざりしが、廣東に於て通商するの特許を得、同時に我が日本は、千六百三十九年(寛永十六年)以後、歐洲諸國の通商を禁ぜしに拘らず、ひとり、荷蘭は、耶蘇教を傳播せざるの故を以て、長崎の一港に於て、貿易に從事することを許され、十七世紀の東洋貿易は、幾んど、荷蘭の獨占に歸せり。

荷蘭の記事

荷蘭は、明史に和蘭といひ、支那人は、はじめ稱して、紅毛夷といへり。その人、深目長鼻、髮眉鬚皆赤きが故なりといふ。史に其地の所在を誌して、曰く、西南海中に在り、佛朗機に近し、と。之に次いで、その船舶の外形を記せし數條は、簡單なりと雖も、巧に當時の帆船を畫き出したるを見るべし。曰く、荷蘭の本國は、中華を去ること絶遠、華人未だ嘗て至らず。その恃むところは、惟だ巨舟大礮、舟の長さ三十丈、廣さ六丈、厚さ二尺餘、五桅を樹て、桅下に二丈の巨鐵礮を置く。之を發せば、石城を洞裂すべく、數十里に震ふ。世に謂ゆる紅夷礮、即ち其製なり。桅後に照海鏡を置く、大さ徑數尺、能く數百里を照らすといふ、と。

荷蘭の支那日本の通商に次いで、海上よりせる英佛二國の東洋經略は、時、すでに清初に係り、陸上よりせる露國の東方侵略と、前後相若くを以て、ともに後章に讓り、こゝには、耶蘇教の弘布を主とし、歐洲近代人文の東漸に就いて、略述するところ無かるべからず。

第二十四章　耶蘇教及び歐洲近代人文の傳播

耶蘇會派

耶蘇教の支那に於けるや、その由つて來るところ、固より久しと雖も、唐代景教の蹟は、武宗の排佛とともに亡び、元代羅馬法王の宣教は、蒙古族の驅除とともに、其影を歛め、わづかに、糎粗に行はるゝも、未だ支那に行はれず。この時に方り、歐洲の耶蘇教は、ルーテルの革新以後、日新の知識に依賴し、諸般の方面に於て、大進歩をなし、數ば困敗すと雖も、毫も屈せず。舊教も、之に刺激せられ、西班牙のイクナシヤス、ロヨラは、內部より、舊教の改善をなさむことを企て、耶蘇會派を組織し、兩教相並んで、行はれしが、葡西二國が、主として、東洋の商權を占斷せしに由り、新に支那に入りし耶蘇教は、實にこの耶蘇會派なりき。

利瑪竇

千五百四十二年、耶蘇會派の東洋布教總長フランシアクサウイエルは、印度に來着してより十年の後、自らゴアより、支那に向ひしが、途中澳門の西南セントジヨンス島に於て、病歿したり。こゝに於て、後任者ヴリニヤニは、ミカイル、ロージヤ及びマッテオ、リッチ(利瑪竇)を支那に派遣し、千五百八十年(萬曆八年)を以て、香山澳の澳門に着し、翌年遂に廣東地方官の任所たる肇慶府に住居し、且つ家屋を建設するの許可を得、佛僧の衣を着け、土語を修習しその、傍、土人を教化せり、これを

耶蘇會支那布教の嚆矢となす。すでにして、ロージャは、布教の好望を報告せむが爲に、歐洲に歸り、リッヂは、遂に僧衣を脱して、儒服を着け、廣東・南昌を經て、南京に至るや、その地の大官、爭つてこれを尊重せり。かくて、澳門上陸の後、二十一年、千六百一年(萬曆二十八年)を以て、その同志パントージア(龐迪我)を伴うて、北京に至り、方物及び基督母子の圖を獻ず。神宗、之を引見して優遇し、朝官徐光啓・李之藻等、厚く其教を尊信し、北京及び其他の地に寺院を建立せり。リッヂは、勵精して布教に從事し、又交友論・天主實義等を著して、支那人にその教法を知らしめ、且つ布教師等は、概して天文曆算に精通せしを以て、大に敬重せられ、リッヂは、徐・李二氏とともに、乾坤體義・幾何原本・測量法義等、有益の著譯を出し、西洋の新科學を支那人の頭腦に注入せり。

利瑪竇の布教方法

リッヂの死は、千六百十年(萬曆三十八年)に在り、年五十八といふ。リッヂの布教の方法は、大に支那固有の習慣思想を斟酌し、之と耶蘇教義とを調和し、大に弘教を計りしが故に、功績頗る觀るべきものあり。その根柢、牢固にして、殆んど拔くべからず。その會徒の規定を定むるに際し、祖先禮拜・孔子崇拜等、單に一個の俗事として、之を默許せしが如き、その主なるものなり。而して、これ實に後年紛議を生ぜし所以にして、リッヂの教義は、支那人一般に耶蘇教の正義として考へられたり。

明末の耶蘇教

千六百十六年(萬曆四十四年)神宗は、禮部侍郎沈漼の言を納れ、一たび耶蘇教を堅禁し、宣教師等に退去を命ぜしが、徐光啓、上書して、之を辯ぜしに由り、六年の後、解除せられたり。この頃、北京には、リッヂの後、パントジャ・ウルシス(熊三拔)・ロンゴバルヂ(龍華民)・デアス(陽瑪諾)等、有力なる宣教師あり。次いで、獨逸人アダム・シャール(湯若望)の來るあり、天主教、漸く行はる。若望は、徐光啓の推薦を以て、曆法を正し、明主の信任を得たり。蓋し彼等が天文曆法に通じて、能く欽天監推步の誤謬を正し、その言ふところ、常に實際の天行に符合せしは、その最も敬重されし所以にして、その結果、宣教師等は、常に天文觀測の任に當り、又朝命を奉じて、大砲を鑄造せしことあり。この間、布教は、愈よ盛にして、明末には、信徒數千に及び、その内、宗室十四人・内官四十人・顯官十四人ありしといふ。明の滅びむとするや、王太后及び龐天壽が、書を羅馬法王に贈りて、遙に憐憫の惠を乞ひしが如き、以て、その一斑を知る

清初の耶蘇教

べきに非ずや。

明清交代の際、兵戈滿地、布教事業は、大に困難を極めしが、北支那の宣教師は、滿州に仕へしを以て、なほ多少の望あり。而して、南支那の宣教師は、明室に心を寄するもの多く、その滅亡とともに、失望の境に沈淪するを免れず。幾もなくして、北支那の宣教師も亦た順治帝の崩後、大打擊を被り、乾隆帝、又禁令を厲行せしを以て、萎微して振はず。加ふるに、十八世紀の歐洲は、騷亂殊に甚しく、異邦の布教に留意するの暇なきを以て、布教事業は、殆んど中絶し、半世紀前に至るまでは、特に言ふべきものあらず。その間の詳細なる事實は、後章別に述ぶるところあるべし。之を要するに、支那人が、歐人東航の爲に得たる利益は、耶蘇教に在らずして、むしろ新科學に在り。もし善く之を輸入し、咀嚼すれば、國民思想を刷新し、頑冥自尊の陋習を洗除し得べかりしや必せりと雖も、遂に此に及ばず、時勢即ち然りとはいへ、まことに嘆惜すべきなり。

日本に於ける耶蘇會派の布教は、支那に先ち、且つクサウイエルが、自ら手を下して、經營せしものなり。はじめ、ピントーが、鳥銃を種子島に傳へし後、千五百四十七年(天文十六年)再び滿剌加より乘船し、種子島に入り、直に豐後の府内に至るや、時會ま大友家に紛亂ありしを以て、去つて、鹿兒島に至り、滯留二三日にして、將に錨を開かむとするとき、忽ち二騎あり、海岸より馳せ來り、急に船に投ぜむことを求む、因つて之を許して解纜す。その一人は、風采賤しからざる少年にして、名を半次郎(了西)と呼び、人を殺せし爲に、禍を避くるなりといふ。ピントーの滿剌加に歸るや、フランソワ、クサウイエル、恰も布教の目的を以て其地に在りしを以て、半次郎を依托す。クサウイエル、之を携へてゴアに歸り、洗禮を受けしめ、名を與へてポーロといふ。ポーロ、數ば日本布教の有望なるを說くや、クサウイエルは、意を決し、千五百四十九年(天文十八年)ポーロ及びコスムデ、トレス・ジャン、フエルナンデスを伴うてゴアを發し、同年鹿兒島に來着し、島津氏に謁し、布教の許可を得たり。これ耶蘇教の我が日本に入りし濫觴にして、耶蘇會派、漸く傳播す。クサウイエルの鹿兒島に在るや、日本語を學び、四十日を過ぎざるに、使徒行傳の注解等を譯し畢れりといふ。この時、葡人の貿易場は、平戸に定まり、且つ翌年葡船鹿兒島に來らず、

日本耶蘇教の起原

仍つて、島津氏の保護を失ひしを以て、乃ち平戸に移つて布教し、洗禮を受くるもの、五百人に及べり。こゝに於て、クサウイエルは、京師に赴かむと欲し、博多を經て、山口に至り、これより、一商估の從僕に變裝し、貨物を負うて、京師に至れり。時に京都は、戰亂の區にして、之に加ふるに、左右の人士に贈る資を缺きたるを以て、クサウイエルは、天子にも、將軍にも、謁見するの機會なく、空しく、平戸に歸りしが、その後、贈品を携へて、再び山口に至り、國主に面謁するを得、留ること一年ならずして、信徒三千人を作れり。この時、葡船復た豐後の府中に來泊すと聞き、クサウイエルは、他の二人を山口に留め、赴き見れば、ピントー、復た來りしなり。クサウイエルは、仍つて、大友氏に謁し、その面前に於て、佛僧と理義を論難して、これを折き、多くの改宗者を作りし後、千五百五十一年、二人の日本人を伴ひ、ピントーの船に乘じて、ゴアに歸れり。この日本人の一名は、ゴアに歿し、一名は歐洲に赴き、羅馬に至り、その後、葡國コインブラの宗教學校に於て、身を終りしといふ。

クサウイエルが、支那布教を試みむとして、航海中に死せしは、實に其翌年に在り。而して、その命を奉じて來れる三名の宣教師は、この年、鹿兒島に到着し、進んで、豐後及び山口に入れり。その後、千五百五十八年(永祿二年)には、教父ガスパルト、ウイレラ、頭髮鬚髯を剃り、日本服を着して、京師に入り、將軍足利義輝に謁し、後、織田信長に尊信せられ、その徒アルメーダ、アロエ等とともに、熱心に布教に從事し、その保護によりて、京都に南蠻寺を建て、安土にも會堂を建設せり。これより先、千五百六十四年、教師トレーといふもの、平戸に會堂を建てゝ、天門寺といふ。これ實に本邦耶蘇會堂設立の權輿にして、南蠻寺は、之に後ること四年なり。

會堂の建設

日本耶蘇教の流布

ウイレラ歿後、カブラルといふもの、その後を繼ぎ、グネッチ等とともに、布教に勵精せり。この時に方り、九州の諸侯は、多く耶蘇教を信奉し、殊に大村純忠は、千五百七十一年(元龜二年)、當時一小漁村たりし長崎を開いて、葡國船の出入を公許せしを以て、この地、忽にして、耶蘇教徒の巢窟となり、信徒次第に增加し、現に千五百七十七年(天文五年)東洋布教總監ヴリニヤーンは、傳道視察の爲め我が邦に來り、四年の後、歸航せしが、その統計によれば、當時日本の基督教徒は、十九萬にして、寺院二百、牧師五十九人に達せりといふ。その盛、想見すべきなり。

三侯の使者

ヴリニヤーンの歸らむとするや、大友宗麟・有馬晴信・大村純忠の三侯は、羅馬に使節を派遣するに決し、大友の親族たる伊東義賢と、有馬の一族たる千々岩清左衛門とを正使とし、二人の從者を附し、ともに出發せしめたり。時に一千五百八十二年二月(天正十年正月)にして、八十五年三月を以て、羅馬に着し、法皇に謁見し、往復八年を經、一千五百九十年(天正十八年)を以て歸りしが、この間に、日本に於ける耶蘇教は、形勢全く一變せり。

耶蘇教弘布の一頓挫

信長秀吉の輩、もとより宗教の何者たるを解するものに非ず、殊に信長が、耶蘇教を公認せしは、佛教徒に對する宿憾を報ぜむが爲にせし愛憎の私念のみ。故を以て、晩年に及びては、その害を慮り、之を抑制せむと欲したり。秀吉その志を承け、千五百八十五年(天正十三年)先づ南蠻寺を廢毀し、次いで、九州平定の時、長崎在留の教師カスバル、チロの擧動を怒り、令を全國に傳へて、之を嚴禁し、チロ等を平戸に移し、藤堂高虎を長崎に遣し、其地に在る大村氏の屬邑を沒し、二十日を期し、布教師をして歸國せしめたり。時に三諸侯の使節、遠く歸り、ゴア總督の書を呈し、秀吉之に返簡を送りしも、布教を許さず。然れども、教師グネッチは、大阪に潛伏し、その他、諸處に奔竄するもの多く、或は摘發せられて、嚴刑に處せられしものありしといふ。

秀吉、耶教を禁ず

原田孫七郎の呂宋經略策を秀吉に說くや、秀吉書を馬尼剌の太守に與へて、その來朝を促せり。太守、乃ち使者リアノを我國に遣し、秀吉に見えしむ。この使者とともに來りし僧侶數輩は、耶蘇教派を排斥して、フランチエスコ派・ドミンコ派・アゴスチン派を弘布せむことを企てしが故に、秀吉大に怒る。尋いで、西班牙の商船、偶ま土佐に漂着し、その船長、世界圖を示し、自國の版圖廣大なるを誇り、宗教を以て領土擴張の第一手段となすを說くや、秀吉傳聞して、益す耶蘇教を嫌忌し、終に諸派の宣教師二十六人を捕へて、長崎に送り、嚴刑に處し、其地の奉行に命じ、宣教師を集めて、之を海外に放逐せしめたり。然れども、諸方に潛伏するもの、なほ少からず。商賈に僧衣を着けて、乘船せしむる等、種々の奸策を用ひしといふ。すでにして、秀吉薨ぜしを以て、耶蘇教徒は、復た勢を得、ヴリニヤーン再び來りて、布教に從事し、西班牙の宣教師も亦た來り、互に競爭して、教徒を作りしが故に、耶蘇教の勢力、

一時天下に瀰漫せり。伊達政宗が、その臣支倉六右衛門常長を遣し、フランチエスコ派の宣教師ソテルとともに、歐洲に赴き、法王に謁見せしめたるも、亦たこの結果に外ならず。常長往復七年にして歸來せしが、この間、又形勢一變し、加ふるに、政宗久しからずして逝きしを以て、亦た觀るべきものなかりき。

德川氏耶教の禁

德川氏は、その初、海外と交通するの意なきに非ざりしが、耶蘇教徒は、禁を犯して、益す傳播し、且つ蘭人及び英人は、新に我が國に來り、その必要上、葡西兩國人を排斥せむと欲し、大に耶蘇教の害を說きしを以て、幕府は、屢ば令を下して、之を奉ずるを嚴禁し、攝津高槻の城主高山友辭・志摩鳥羽の城主內藤如安等百餘人は、追放せられて、呂宋に赴きしが、尋いて、千六百三十七年(寛永十四年)に至りて、島原の耶蘇教徒、不軌を謀り、その勢、猖獗にして、容易に下らず。翌年四月に至りて、わづかに平定せり。これより、德川氏は、益す耶蘇教の制禁を嚴にし、且つ葡人の來航を拒み、翌三十九年、葡船三隻、長崎に來りしも、之を却け、翌年又一隻來りしかば、その船を焚き、六十四人を戮し、十三人を免し、支那船に托して、歸らしむ。これより、葡人復た來らず。耶教制禁の手段として、踏繪その他の方法を以て、信徒の改宗を確め、その之を拒むものは、死刑に處せしを以て、前後刑に行はれしもの三十餘萬人といふ。その後、間ま餘蘖と思はるゝものなきに非ざりしが、德川氏二百餘年の間、耶蘇教は幾んど全く絕滅せり。

朝鮮に於ける歐洲科學

歐人交通初期の我が日本は、耶蘇教の騷擾の外、特記するものなかりき。勿論零碎の事實は、歐洲人文の輸入を證すと雖も、之を大體より觀るときは、幾んど、言ふに足るものなし。

支那・日本の二國、歐人東漸の端を啓くこと、上に述べたる如く、この間に介在する朝鮮の地、豈に獨り些の關係なくして止まむや。壬辰の亂に繼いて、宣祖の後、光海君を經て、仁祖王に至る。その九年、陳奏使鄭斗源、明京より還り、西洋の火砲及び書籍を獻ず。これ西洋學術書の半島に入りたる權輿なり。斗源の書に曰く、西洋は中原を去ること九萬里、三年にして達すべし。陸若漢といふものあり、利瑪竇の友なり、かつて火砲を制して、紅夷毛夷を滅ぼし、且つ尤も天文曆法に精しく、廣東に至るや、紅夷砲を以て、虜師を討たむことを請ふ。明帝以て掌砲教官となし、登州軍

門に送り、待つに賓師を以てす。欽天監の修曆、亦た若漢の言を用ふ。若漢來つて臣を見る、時に年九十七、精神秀麗、飄々として神仙中の人の如し。臣、一火砲を得て歸り獻ぜむことを願ふ、若漢之を許諾し、并に其他の書器を給す。乃ち後に列錄す、と。その目に曰く、治曆緣起一冊・千里鏡說一冊・天文曆一冊・利瑪竇天文書一冊・遠鏡記一冊・職方外記一冊・西洋國風俗記一冊・西洋國貢獻神威大鏡疏一冊・天文圖南北極兩幅・天文廣數兩幅・萬里全國圖五幅・紅夷砲題一本・千里鏡一部・日晷鏡一坐・自鳴鐘一部・火砲一部、と。然れども、這般諸物の傳來は、毫も人文革新の動機とならず、後世に傳ふるもの、幾んど之なし。

朝鮮の西曆算法

朝鮮は、從來明に服屬し、その頒つところの曆を用ひ、別に推策したることなかりしが、世宗の時、はじめて、推策の法を立て、南在金等、傳來の數術に依つて、推步を試みしが、仍ほ大統曆法に依りしを以て、日月の食等、往々にして合はざることあり。仁祖王の二十二年、觀象監提調金堉、北京に使し、湯若望の時憲曆法を用ひ、崇禎年間より、施行するを聞き、その書數種を購うて歸り、觀象監官金尙茫等をして講究せしめ、十年を積んで、はじめてその門路を得、孝宗王の四年はじめて之を施行せり。然れども、こは推步の法、西洋曆に本づきしのみにして、眞の西洋太陽曆を用ひしには非ず。

朝鮮の耶蘇教は、清の聖祖の世、支那より來りしが、歷代諸王、之を嚴禁し、今王の世に至るまでは、特記すべき事實なし。

歐人東漸初期の趨勢

之を要するに、歐人の東漸、興味ある事實に富むと雖も、未だ以て東洋史上特絕の大事變を惹起するに及ばざりし所以は、彼等が單に商業上の意義を以て交通し、國際上の交涉を爲す能はざりしに由る。貿易通商の公許・耶蘇教の傳播等、特に深遂なる理由あるに非ずして、要するに、東洋人の好奇心を刺衝して然るのみ。況んや、西葡蘭の諸國は、當時衰運に臨み、英佛二國は、未だ手を海外に延ばすの餘裕あらざるに於てをや。加ふるに、歐洲諸邦の領土、東洋に於て、未だ遍からず、相去ること萬里、彼此の間、往々にして、誤解を生じ、深く事情を熟知するに及ばず、その間、彰著の事項に乏しき、固より怪しむに足らざるなり。

左に附するは、明清の間に於ける支那傳道宣教師の姓名表にして、亦た以て、一

時の産を推知すべきなり。

支那傳道宣教師姓名洋漢對照表

(主として十六世紀より十八世紀の間を限り、但元の時代はこゝに掲らず。表中の略字、伊―耶蘇會、ア派―アゴスチン派、フ派―フランチエスコ派、ド派―ドミニコ派、ア派―アンサン派)

Aleni, Giulio.	艾儒略	一伊、六四九年、八月三日福州に死す、年六七。
Bahr, Florian.	魏繼晉	一伊、七四一年、六月六七日北京に死す、年六五。
Barelli, Agostino.	艾斯玎	伊、一七〇七年頃浙江地方に布教す。
Benevente, Alvarode.	白□	ア派、西人、一六八〇年來る。
Bonjour.	潘如	ア派、佛人、一七一一年頃測量に從事す。
Bouvet, Joachim.	白晉(進)	一伊、七三〇年六月二八日北京に死す、年七四。
Boym, Francesco.	卜彌格	伊、しで波羅島に赴く、一六四三年來る。一六五九年廣西に死す、一六五〇年明の使者年四八。
Brollo, Brsilio.	潘國光	一伊、六七一年四月二五日上海に死す、年六四。
Brollo, Basilio.	葉宗賢	一ア派、一七〇四年伊人、一六八四年來る。七月一六日北京に死す。
Buglio, Luigi.	利類思(斯)	一伊、六八二年伊人、一六三七年來る。一〇月七日北京に死す。
Cardoso, Francisco João	麥大成	葡、葡人、一七七一年頃測量に從事す。
Castiglione, Giuseppe.	郎世寧	一伊、七六四年伊人、死す、年七〇餘。
Castner, Gasper.	龐嘉賓	一伊、七〇九年墺人、一六九七年來る。一月九日北京に死す、年四四。
Cattaneo, Lazare.	郭居靜	一伊、六四〇年伊人、一五九一年來る。一月九日杭州に死す、年八〇。
Charme, Alexandredela.	宗君榮	一伊、七六七年佛人、一七二八年來る。七月北京に死す、年七二。
Chavaguac, Emericde.	沙守信	一伊、七一七年〇一年來る。九月四日鎮州に死す。
Contancin, Cyricus.	費當信	一伊、七三三年佛人、一七〇一年來る。死す、年六四。
Costa, Ignacio. da	郭納薩	一伊、六六六年葡人、一六三四年來る。五月廣東に死す、年六七。
Costa, Giovanni Giusepped'a.	羅懷忠	伊、伊人、一七四七年死す。
Couplet, Philippe.	柏應理	一伊、六五九年白人、一六九三年來る。日ョアに赴くの途に死す、年七一。
Cunha, Simon da.	瞿西滿	一伊、六〇年葡人、一六二九年來る。九月澳門に死す、年七三。
D'Almeida, Joze Bernardo.	索德超	伊、葡人、一八〇五年死す。

Dentreco les Francois Xavier.	殷弘(洪)緒	一會、七四佛人、一六九年來る。一七一年七月二日死す、年七八。
D'Espinua, Joze.	高悌思	會、葡人、一七八年死す、年六七。
Des Roberts Joseph Louis.	趙類思	一會、七六佛人、一七三七年來る。〇年四月三日北京に死す、年五七。
Diaz, Emmanuel	陽瑪諾	一會、六五葡人、一六一〇年來る。九年三月四日杭州に死す、年八五、則餘演四。
Diestel, Bernhard.	蘇納	會、獨人、一六五九年北京に來る。
Duarte, Jean.	聶若望	葡人、一七〇〇年來る。
Ferran, Andre.	郎安德	一會、六六葡人、一六五九年來る。一年福州に死す、年四〇。
Ferreira, Francesco.	李方西	會伊人、一六七二年死す。
Ferreira, Domingos Joachim.	禄文高	ヴ派、葡人、一八二四年死す。
Ferreira, Gaspar.	費奇規	一會、六四葡人、一六〇四年來る。九年三月二七日北京に死す、年七八。
Figuerdo, Roderic de.	費樂德	一會、六四葡人、一六二三年來る。二年一〇月九日開封府に死す、年四八。
Fontaney, Jean de.	洪若	一會、七一佛人、一六八七年來る。〇年死す、年六八。
Fouquet, Jean Francois.	傅聖澤	一會、七二佛人、一六九九年來る。三年死す、年六一。
Frapperie, Pierre.	樊繼訓	一會、七〇佛人、一六九九年來る。年死す。

Fridelli, Xavier Ehrenbertna.	費隱	會、獨人、一七四〇年死す。
Froes João.	伏若望	一會、六三葡人、一六二四年來る。年七月一一日杭州に死す、年五〇。
Furtado, Francisco.	傅凱濟	一會、六六葡人、一六二一年來る。年一一月二一日澳門に死す、年七一。
Gabiani, Domenico.	畢嘉	會、伊人、康熙時代に支那に在り。
Gerbillon, Jean Francois.	張誠	一會、七〇佛人、一六八五年來る。年死す、年五四。
Gollet, Jean Alexis de.	郭仲傳	會、佛人、一七〇一年頃支那に布教す。
Gogeisel Antonius.	鮑友管	會、獨人、一七七一年死す。
Gouvea, Alexandre de.	湯亞立山	フ派。
Gouvea, Antonio de.	何大化	一會、六七葡人、一六三六年來る。年三月六一四日福州に死す、年八五。
Gravina, Geronimo de.	賈宜睦	一會、六六伊人、一六三七年來る。二年九月四日浙州に死す、年五九。
Greslon, Adrien.	瑞仲遲	一會、六九佛人、一六五七年來る。七年三月登州に死す、年七九。
Grimaldi, Filippo, Maria.	閔明我	一會、六六伊人、六年露國に使し、一六九二年復命す。
Grueber, Johann.	白乃心	會、獨人、一六五九年北京に來る。
Hallerstein, Augustin von.	劉松齡	會、獨人、一七七四年死す、年七二。

Herdtricht, Christian.	思格理	會、獨人、一六八四年死す、支那に在ること三五年といふ。	
Herview, Julien Placide.	赫蒼璧	會、佛人、一七四六年澳門に死す、年七六。	
Hinderer, Romain.	德瑪諾	會、佛人、一七〇七年來る。一七四四年八月南京に死す、年七五。	
Ignatius	伊納爵	ア派。	
Intorcetta, Prospero.	殷鐸澤	會、伊人、一六五九年來る。一六九六年一〇月三日杭州に死す、年六八。	
Jartous, Pierre.	杜德美	會、佛人、一七〇一年來る。	
Koffer, Xavier Andrew.	瞿紗微	會、英人、明の永曆太后等に、洗禮を施す。一六五一年死す。	
Kogler, Ignace.	戴進賢	會、獨人、一七一六年來る。一七四六年三月二九日北京に死す、年六六。	
Laurifice, Emmanuelei.	潘國良	會、伊人、一六七一年來る。	
Le Comte, Louis.	李明	會、佛人、一六八五年來る。	
Le Favre, Jacob.	劉廸我	會、佛人、一六七一年北京に來る。	
Lobelli, Giovanni Andrea.	陵(陸)安德	會、伊人、一六五九年來る。一六八三年澳門に死す、年七三。	
Longobardi, Nicolao.	龍華民	會、伊人、一五九七年來る。一六五四年九月一日北京に死す、年八八、別號精華。	
Magalhaens, Antonio, de.	張安多	會、葡人、一七二一年葡萄牙に使す。	
Magalhaens (Magaillans) Gabriel de.	安文思	會、葡人、一六四〇年來る。一六七七年五月六日北京に死す、年六六。	
Mailla, Joseph Marie Annede Moyria de.	瑪秉正	會、佛人、一七〇三年來る。一七四八年六月二八日北京に死す、年七九。	
Martini, Martino.	衛匡國	會、閩人、一六四三年來る。一六六一年六月六日杭州に死す。	
Mata Mancel Antonio de.	瞿良士	會、葡人。	
Melon Guillaume.	隆盛	會、佛人、一七〇七年頃布教す。	
Medez, Mancel.	孟由義	會、葡人、一六八四年來る。一七四三年三月澳門に死す、年八七。	
Monteiro, João.	孟儒望	會、葡人、一六三七年來る。一六四八年印度に死す、年四五。	
Motel Jacques.	穆廸我	會、佛人、一六五七年來る。一六九二年六月二日武昌府に死す、年七二。	
Monrao, João.	穆敬遠	會、葡人、一七一七年頃布教す。	
Munoz, Pedro.	郭多祿	ド派、西人、一七〇七年頃布教す。	
Noël, François.	衛方濟	會、白人、一六八七年來る。一七二九年九月一七日佛國に死す。	
Ocha, Jose.	柯若瑟	フ派、四人、一六八七年來る。一六一九年死す。	
Orliz, ou Hortis.	白多瑪	ア派、西人、一六九五年來る。	
Pantoja, Diego de.	龐廸我	會、四人、一五九九年來る。一六一八年一月澳門に死す、年七四、別號順陽。	

Parrenin, Dominique.	巴多明	仏蘭人、一七四一年九月二九日北京に死す、年七六。
Pedrini Theodoric.	德理格	ヴ派、伊人、一七四六年死す。
Pereira Jose.	李若瑟	葡人、一七〇七年頃布教す。
Pereyra, Andre.	徐懋德	葡人、一七四三年死す。
Pereyra, Thomaz.	徐日昇	葡人、一六七三年来る。一七〇八年一二月二四日北京に死す、年六三。
Piñuela, Pedro.	石鐸琅	フ派、メキシコ人、一六七六年来る。一七〇四年七月三〇日漢州に死す、年五四。
Pires, Cajetanus.	畢學源	ヴ派、葡人、一八二三年欽天監監副となる。
Premare, Joseph-Marie de.	馬若瑟	仏蘭人、一六九八年来る。一七三六年九月一七日澳門に死す、年七〇。
Provana, Giuseppe Antonio.	艾若瑟	仏蘭人、一七〇七年羅馬に使し、一七一九年支那に使命の途に死す。
Regio. Jean Baptiste.	雷孝思	仏蘭人、一六九八年来る。一七三八年死す、年七五。
Rho, Giacomo.	羅雅各	伊人、一六三四年来る。一六三八年四月二六日北京に死す、年四八。
Riberi, Joseo.	李拱辰	ヴ派、葡人、一八二六年死す。
Ricci, Matteo,	利瑪竇	仏蘭人、一五八三年来る。一六一〇年五月一一日北京に死す、年五八、別来錄四巻又崎人。
Rocha, João. da.	羅如望	仏蘭人、一五九八年来る。一六二三年三月杭州に死す、年五八。

Rodrigũez Andre,	安國寧	仏蘭人、一七九六年死す、年六八、
Rodrigũez, João.	陸若漢	仏蘭人、一六三〇年澳門の葡萄牙兵を率ゐて明の内亂を定む。
Rodrigũez Simao.	李守謙	仏蘭人、一六七九年北京に入る。
Rongemont, Francois de.	魯日滿	仏蘭人、一六五九年来る。一六七六年一一月四日漢州に死す、年五二。
Rudomia, Andre.	盧安德	仏蘭人、一六二六年来る。一六三二年九月五日福州に死す、年三六。
Ruggieri, Michaele.	羅明堅	伊人、一五八一年来る。一六〇七年五月一一日伊國に死す、年六四。
Samhiaso, Francesco.	畢方濟	伊人、一六一三年来る。一六四九年廣東に死す、年六七。
San Juan Bautista Manuel de.	利安寧	フ派、四人、一六八五年来る。一七一〇年三月一〇日北京に死す。
San Pascual, Augustin de.	利安定	フ派、四人、一六七〇年来る。一六九五年アカプルコに赴くの途に死す。
Santa Maria, Antonio de.	利(栗)安當	フ派、四人、一六三三年来る。一六六九年五月一三日廣東に死す、年六七。
Sande, Eduarde da.	孟三德	仏蘭人、一五八五年来る。一六〇〇年六月二一日澳門に死す、年六九。
Schall von Bell, Johann Adam.	湯若望	仏蘭人、一六一一年来る。一六六九年八月一五日北京に死す、年七八、別錄道未。
Seixas João de.	林德瑞	仏蘭人、一七四一年来る。一七八五年一月七日北京に死す、年七五。
Semede, Alvaro.	魯德照	仏蘭人、一六一三年来る。一六五八年五月六日澳門に死す、年七三。

Serra.	高守謙	監ッ派、教士を用ひず。葡人、一六三七年疾を以て歸國す、以後欽天
Sickelparth, Ignaz.	艾啓蒙	會、墺人、一七八〇年死す、年七一。
Silva. Antonio de.	林安多	會、葡人、一六九五年來る。
Slaviszek, Karl	殷嘉樂	會、墺人、一七一六年北京に來る。
Smogolenski, Johann Nikolaus.	穆尼各(閣)	宇加維、會、波蘭人、一六八〇年北京に來る。
Soerio, João.	蘇如漢	一會、葡人、一五九五年來る。一六〇七年八月澳門に死す、年四一。
Souza, Manuel da.	索瑪諾	會、葡人、一七〇七年頃布教す。
Stadlin Franz.	林濟各	會、獨人、一七四〇年死す、年三四。
Stumpf, Bernhard Kilianus	紀利(理)安	會、獨人、一六三四年北京に來る。
Suarez, Jose.	蘇霖	會、葡人、一七三六年死す。
Tartre, Pierre Vincent du.	湯尚賢	一會、佛人、一七〇一年來る。一七二四年死す、年五五。
Tellez, Manoel.	德瑪諾	一會、葡人、一七〇四年來る。一七二三年廣州に死す、年四七。
Terenz (Schreck) Jean,	鄧玉函	一會、獨人、一六二一年來る。一六三〇年北京に死す、年五四。
Testard, Jean.	觀克修	會、佛人、一七〇七年頃布教す。

Thomas, Antoine.	安多	會、佛人、一七〇九年死す。
Tillish, Franz.	楊秉義	會、墺人、一七一六年死す。
Trigault, Nicolas.	金尼閣(各)	一會、佛人、一六一〇年來る。一六二八年一一月一四日杭洲に死す、年五一。
Tudeschini, Augustin.	杜奧定	一會、伊人、一六三一年來る。一六四三年廣州に死す、年四五。
Ursis, Sabatthinus de.	熊三拔	一會、伊人、一六〇六年來る。一六二〇年五月三日澳門に死す、年四五、別號有綱。
Vagnoni, Alfonso.	高一志	一會、伊人、一六〇五年來る。一六四〇年四月一九日死す、年七四、又玉豐道と稱す。
Valet, Jean.	汪汝望	會、佛人。
Varo, Francisco.	萬濟國	ド派、西人、一六五四年來る。
Verbiest, Ferdinand.	南懷仁	一會、白人、一六五九年來る。一六八八年一月北京に死す、年六五、字勳卿、一字敦伯、號嵩齡。
Visdelon, Claudede.	劉應	一會、佛人、一六八五年來る。一七三七年死す、年八二。
Wolfgang de la Nativite.	那永福	カルメル山派。
Xavier, Saint Francois de.	方濟各	一會、西人、一五五二年一一月二日上川島に死す、年四六。

(三)　明の末世

第二十五章　豐臣秀吉の征韓（上）

倭寇の朝鮮に於ける、便を以て、前に述べたり。こゝには、主として、豐公征韓の前に於ける、朝鮮の內治に就いて、略述せむ。

朝鮮の太宗

かつて前に述べたる如く、朝鮮の太祖康獻王李成桂、高麗に代りて、國中を統一し、使を明に遣して、狀を告げ、國號を定め、印信を改鑄し、都を漢陽に遷し、都城を築き、經濟六典等を纂し、前代の弊政を革め、王業の基を開きしが、定宗恭靖王を經て、太宗恭定王に至るや、守成の英主を以て、大に文治を布き、銅製活字の使用を盛にし、讖諱諸書を焚き、奴婢娼妓の開放を企て、女服を改め、禪敎の二宗を許し、他の諸敎を禁じ、都鄙の寺社を毀ち、その奴婢田畝を沒し、兵を出して、我が對馬を討ち、宗氏と約して、貿易を許したり。その治世、盛昌にして、海東の堯舜を以て稱せらる。その子世宗莊憲王、在位三十二年、心を文學政治に用ひ、管背法を除き、養老の宴を行ひ、集賢館を設け、賢士を集めて經筵を開き、三綱實制及び治平要覽等の書を纂し、又諺文を創撰し、祿法を頒ち、箕子の廟を立て、都城を改築し、國中靜謐にして事なく、先王に次いで、治世の良主と稱せらる。その後、文宗恭靖王を經て、端宗恭懿王に至り、叔父世祖惠莊王の爲に、位を簒せらる。世祖は、やゝ殘忍なれども、天資豪邁にして、經國の雄圖あり、又學を好み、最も性理の學に精しく、兼ねて、學事を奬勵し、その後、數代に亘りて、有益なる大撰著、頻々として世に出てたり。就中經國大典は、睿宗哀悼王の世に成り、成宗康靖王に至りて、中外に頒布す。開國以來、こゝに一百年、朝鮮王國は、正に隆昌の極に達し、雍々として、太平の象あり、曠古以來、未だ觀ざるところとす。

世祖

燕山君

成宗の子燕山君、位に即き、淫酒を好み、庶民を苦しめ、國內騷擾、咸な亂を思ふ。燕山君、大に怒り、その黨を逮捕して、獄に下し、大に誅戮を行ふ。これを士禍獄といひ、碎骨飄風の刑の如き、殊に慘虐を極む。すでにして、獄平らぐや、各道の娼婦を聚め、祖廟を撤して、遊嬉の所となし、日夜淫虐を事とす。こゝに於て、遂に廢せられ、その弟中宗恭徽王立ち、大に前代の弊政を改革し、賢良科を設けて、人材を登庸し、學田を賜ひ、文學を奬勵し、王親ら耕作し、妃親ら蠶桑し、儉を旨として、祭祀を尊び、又鄉

約法を行ひ、量田の法を制し、賦斂を輕くし、上下の禮・衣服の制を定む。まことに中興の良主たるに負かずと雖も、衰運なほ挽回されざるものあり、但し朝鮮の文化は、この間、最も隆昌を極め、東國通鑑・改正五禮儀・輿地勝覽・三國節要・大典續錄・歷代年表・東文選の類、皆當時刊行されたり。

中宗恭徽王、在位三十九年にして薨じ、長子仁宗榮靖王立ち、在位わづかに一年にして殂し、その兄明宗恭顯王立つ。時に明の嘉靖二十四年なり。太祖より、歷代使を明に遣し、貢物土宜を贈ること、絶えず。恭顯王、位に即くに及び、亦た使者を遣し、海東青を贈る。明主辭して曰く、珍禽異獸は、朕の欲するところに非ず、それ獻ずるなかれと。後又使者をして明主に對して、大明會典の中、太祖纂弑の事を載するを改むるを請はしめ、明主これを容る。

明の服屬

宣祖の即位

時に倭寇の警、日に促し、因つて備邊司を置きて、之に備へしも、太平日久しく、武備弛廢して功なく、遂に、我が日本と使聘を通ぜざるに至る。恭顯王薨じて、宣祖昭敬王入つて立つ。王、酒色に沈湎し、權臣事を專にして、國政荒廢し、八道の人心、漸く解體し、或は遼東に走るあり、或は日本に投化するあり。經筵官李珥諫めて曰く、國政振はざること久しく、禍測るべからず、兵備を嚴にして、緩急に應ぜむと。柳成龍、之を非として曰く、太平無事の時、經筵を勸勉し、聖經を講ずるを以て、先務とすべし、軍旅は急とするところに非ずと。李珥沒後、當途者、逢迎を事とし、政弛み衰ふ。

秀吉征韓の風志

この時に方り、我が日本は、戰國の末に當り、織豐二氏、相次いで崛起し、秀吉遂に群雄を統率し、關白太政大臣となり、天下兵馬の權を掌握し、遂に征韓の役を起すに至る。半島史に謂ゆる壬辰の亂、即ち是れなり。

秀吉西征の雄志、固より久し。その毛利氏を討たむとして、信長に辭するや、乃ち曰く、君、臣の鄙陋を以てせず、勳舊諸將を舍いて、大任を臣に命ず、臣敢て力を竭さゞらむや。叛を討ち、服を撫し、機に臨み、變を制し、以て中國を定むるは、臣が度內に在るのみ。君の近臣、功を積み、勞を累ね、而かも未だ報ずるところあらず、中國すでに定るとき、願はくは、以て此輩を封ぜよ。臣は直に進んで、勞に乘じ、遂に九州を下し、九州下らば、願くは、その一歲の入を賜はり、糧仗を蓄へ、舟艦を造り、海を濟つて、朝鮮に入らむ。君、臣が功を賞せむと欲せば、願くは、朝鮮を以て請をなさむ。臣乃ち、

朝鮮の兵を用ひ、以て明に入らむ。庶幾くは、君の威靈に倚り、明國を席卷し、三國を合して一となさむ。これ臣の宿志なり、と。或は之を以て、秀吉の巧智、早く信長の猜忌を知り、豫め他日の禍を避けむとするの意に出づとなす。然れども、その事、固より確證なく、予輩は唯だ秀吉が天成の大征服者たるべきを臆想するのみ。而して、秀吉の壯志、暮年に至りて、猶ほ止まず。その北條氏を平げ、旌を關東に前むるや、かつて、鎌倉に遊び、源頼朝の塑像を覩、進んで、その背を撫して曰く、若は我が友なり、徒手、天下を有つは、惟だ吾と若とあるのみ。然れども、若は名族を承藉す、吾が人奴より起るに如かざるなり。吾、遂に地を略して明に至らむとす、若以て何如となす、と。

柚谷康廣

はじめ、秀吉の畿内を定め、次いで、西海に向ふの間、對馬の宗義智に謂つて曰く、汝、朝鮮をして、來聘せしめよ、もし然らざれば、兵を擧げてこれを征せむ、と。義智命を奉じ、その臣柚谷康廣をして、秀吉の書を齎らして、至らしむ。康廣擧止倨傲、平時の使者と異なり。朝鮮大に之を怪しみ、尙州の牧司宋應洞、之を要し、盛に妓樂を設く。應洞衰白、康廣之に謂つて曰く、老夫數年、干戈の中に在り、故に鬢髮盡く白し、君常に聲妓管絃の間に處り、一も憂ふるところなく、而かも、皓白なるは何ぞや、と。すでにして、座上の妓工、禮を失ふ。康廣喝して曰く、汝の國、必ず亡びむ、紀綱毀壞せり、と。然れども、朝鮮王、豐臣氏の書辭、甚だ倨るを惡み、長しへに、その關係を絶たむと欲し、水路險遠にして航し易からざるに托して應ぜず。康廣遂に要領を得ずして歸る。秀吉大に怒り、且つ康廣の朝鮮と私あるを疑ひ、之を族誅す。

竹島の寇

朝鮮の使者至る

秀吉、朝鮮の應ぜざるを憤り、先づ之を滅して、明に入らむと欲し、投化の民沙乙背同を以て、嚮導となし、兵船十六艘を遣し、嶺南外洋より、直に興陽に至り、竹島を剿し、先づ朝鮮の兵力を試む。朝鮮之を竹島の倭寇を稱し、各鎭の舟師、震慴せざるなし。ひとり、鹿島の李大源、進み戰ひしが、我が兵、擊つて之を殺し、即夜馳せて去る。朝鮮、大に之を銜むといふ。

秀吉の關東を伐たむとするや、宗義智及び僧玄蘇を遣して、韓に往いて、その來貢せざるを詰る。朝鮮の宣祖、答ふるに、竹島の事を以てし、投化の叛民を還へし、然る後、通信を議すべしといふ。義智乃ち投化の民十餘人を捕へて之を還へす。宣祖仁政殿に坐し、義智等をして臨ましめ、之を斬り、遂に信を我に通じ、僉知黃允吉、金

誠一を以て使者となし、國書方物を齎し、義智等の還るに從ひ、我が國に來らしむ。秀吉、關東を伐つより至り、仍つて、之を聚樂の第に延き、白銀若干を給す、但だ明使未だ來らざるを以て、心平かならず。使者を放還せしむ。允吉等、堺浦に止まり、答書を請ふこと再三、秀吉乃ち史に命じ、書を作つて、之に與ふ。その略に曰く、日本豐臣秀吉、謹んで朝鮮國王足下に答ふ。吾が邦、諸道久しく分離に屬し、綱紀を廢亂し、帝命を阻格す、秀吉之が爲に憤激し、堅を被り、鋭を執り、西討東伐、數年の間を以て、六十餘國を定む。秀吉は、鄙人なり。然れども、その胎に在るに當つて、母、日の懷に入るを夢む。占者曰く、日光の臨むところ、透徹せざるなく、壯歳必ず武を八表に耀かさむ。これが故に、戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取る。今や海内すでに治まり、民富んで財足り、帝京の盛、前古比なし。夫れ人の世に在るや、古しへより百歳に滿たず、安んぞ能く鬱鬱として、久しく此に在らむや。吾、道を貴國に假り、山海を超越し、直に明に入り、その四百州をして、盡く我が俗に化せしめ以て、王政を億萬斯年に施さむと欲す。これ秀吉の宿志なり。凡そ海外諸藩、後れて至るもの、皆釋さゝるところに在り。貴國先づ使幣を修む、帝甚だ之を嘉す。秀吉、明に入るの日、其れ士卒を率ゐ、軍營に會し、以て我が爲に前導せよ、と。因つて、柳川調信及び僧玄蘇を遣して、與に偕にし、その虚實を探らしむ。宣祖、書を得て、疑懼し、狀を允吉に問ふ。允吉は答ふるに秀吉遠征の意あるを以てし、誠一は以て虚喝となす。宣祖、乃ち誠一をして、私に二人を襲して、その情實を探らしむ。調信曰く、我が主、明に通ぜむと欲し、明答禮せず、故に伐たむと欲するのみ。貴國盡んぞ間に居て、之を和解せざる、と。誠一依違す。玄蘇、聲を厲まし、言つて曰く、今日の議、首鼠兩端なるを得ず、和を講ずるを欲せざれば、乃ち戰はむのみ、と。因つて辭訣して還る。宣祖、はじめて恐れ、稍や邊備を修め、急使を馳せて、之を明に報ず。これより先、琉球王尚寧入貢し、又佛國人、明の地圖及び綵段黄金を獻ぜしことあり。秀吉乃ち琉球王に囑して、明に通ずるを求めしむ。尚寧之を明に告げしも、明報ぜず。すでにして、朝鮮の報を得るや、又海防を申嚴す。秀吉復た義智を遣し、宣祖を責めしむ。釜山に在ること旬餘、報を得ず、怒つて還る。秀吉外征の志、こゝに至りて、愈よ固し。

秀吉征韓の決意

この時、秀吉、小子鶴松を喪ひ、悲哀累月、鬱鬱として樂まず。一日清水寺の閣に登

り、西望して、從者に謂つて曰く、大丈夫、當に武を萬里の外に用ふべし、何ぞ自ら悒鬱するを爲さむと。乃ち還り大に諸將を會し、之に謂つて曰く、吾、諸君の力を藉りて、海內を平定す、亦た以て休むべし。特に諸醜夷、王化を阻むものあり、吾深く之を羞づ。且つ漢土の我を侵す、屢ば之あるも、我よりせしものは、往古神后征韓の一擧あるのみ。吾、側陋より起り、位人臣を極む、何の不足か之あらむ。而して、今齡六十、掌中の珠、倘ま碎け、憂愁の深き、殘年殆んど盡まらむとす。大丈夫、豈に偏土に終るべけむや。すでに秀次をして、邦治を掌らしめ、京師を警衛す、國事憂ふるところなし。因つて自ら將として、朝鮮に入り、其兵を以て、先鋒となし、以て明に入らむとす。彼我が命を拒かば、擊つて、之を滅せむ。而して、遼東より、直に北京を襲ひ、その土を奄有し、多く土壤を割いて、諸君に予へ、諸功臣をして、皆その望を厭かしむる、亦た快ならずや。我之を籌して、すでに熟す。諸君其れ能く我が爲に力を出さむか、と。浮田秀家、首として之を贊し、衆亦た異議なし。秀吉大に喜び、行營を肥前の那古耶に設け、朝鮮の地圖を諸將に頒ち、西南四國の兵を分つて、八軍となし、以て朝鮮の八道に分當し、別に水軍を置き、水陸九軍、合せて十五萬人、又游軍六萬人を團集ず、部署

明及び朝鮮の守備

すでに定まるや、明年を以て、師を出すを約し、關白職を秀次に讓り、自ら太閤と稱し、軍國の事、一に自ら處決す。時に我が紀元二千二百五十一年(西紀一五九一)後陽成天皇天正十九辛卯の年、支那に於ては、明の神宗嘉靖十九年に當る。

すでにして、秀吉、琉球の機密を洩らさむを恐れ、使を遣し、明に貢するを止めしむ。時に明の賈舶陳申等、琉球に在り、琉球の長、史鄭迥と謀り、之を明に告ぐ。明の江右の人許儀後、薩摩に在りて、醫を業とし、又之を福建の軍門に告ぐ。神宗、之を朝鮮に咨ふや、宣祖之に報ずること遲く、神宗因つてその我に通ずるを疑ひしが、使者至るに及び、はじめて釋然たり。然れども、朝鮮の使者、唯だ我に通じて、嚮導をなすの意なきをいふのみ、豐臣氏出兵の狀を陳せざりしを以て、神宗毫も意に介せず、惟だ沿海の要鼎に命じて、戍守を嚴にするを訓示せしのみ。

朝鮮の宣祖、亦た申砬・李鎰等に命じ、沿海の守備を巡視せしむ。鎰は忠淸・全羅の二道に往き、砬は京畿・黃海の二道に向ふ。二人素より名將を以て聞こゆ。柳成龍、砬に問ふに、敵勢の難易を以てす。對へて曰く、憂ふるに足らず、と。成龍曰く、さきに日本は、唯だ短兵のみ、今は鳥銃を兼ぬ、輕視すべからず。且つ國家昇平日久しく、士卒

怯弱、省せざるべからず、と。砬、勇を恃み、懼るゝところを知らず。識者豫め其敗を知るといふ。

小西行長

すでにして、秀吉、那古耶に至り、諸將皆發す。小西行長・宗義智、海路を諸ずるを以て、衆に告げず、潛に其軍を拔いて、先づ發し、倭戸麗倭の徒を以て、嚮導となし、釜山城を衝く。その城、背に高山を負ひ、要害に據り、守兵凡そ二萬。時に僉使鄭撥、偶ま出てゝ絶影島に獵し、警を聞いて、馳せ還る。行長の兵、四面雲集し、且つ後山の頂に踞して、銃を放ち、遂に之を陷る。鄭撥、擄へられて死す。行長、兵を進めて、慶尙道を徇へ、東萊に向ふ。釜山近海、朝鮮の戰艦、多く聚る。我が水軍の將、藤堂高虎、巨濟島を攻め、之を奪ひ、進んで、多太・西生の兩浦を陷る。行長、東萊を圍み、半日にして、之を拔き、守將宋象賢戰死し、次いで梁山鵲院を屠り、兵を分つて、長驅し、向ふところ前なく、慶尙右道、忽ち空虛となる。

加藤清正

はじめ、加藤清正、行長とともに先鋒の命を受く。その朝鮮に至るや、行長に後るゝこと三日、因つて憤恨して、措かず、乃ち別路を取り、慶州を陷れ、進んで、京城に向ふ。宣祖四方の警を聞いて、大に驚き、李鎰・申砬等をして、出でゝ險要を守らしむ。行長、白雨嶺の險を超え、進んで丹月驛に至り、砬を彈琴臺に討つて之を殺し、東路より進み、清正西路より進む。宣祖、京城日に危きを以て、急使を明に馳せて、援を請ひ、王子を分遣して、兵を諸邊に徵し、元帥金命元・申恪等を留めて、漢江を守らしめ、遂に平壤に走る。從者多く道より亡げ、唯だ父子わづかに達するを得たり。

平壤城

行長遂に京城を陷れ、我が軍、皆こゝに會し、浮田秀家、自ら其地に居り、諸將をして、各進取を圖らしむ。こゝに於て、行長は平安道に向ひ、進んで大同江岸に陣し、清正は咸鏡道を徇へ、鐵嶺を陷れ、會寧府に向ふ。宣祖亦た平壤の急を明に告げ、自ら咸鏡道に入らむとせしが、清正その境に在るを聞き、大に驚き、轉じて、義州に走る。

行長の軍、遂に平壤を陷れ、左相尹斗壽・元帥金命元等を走らし、積粟十餘萬を得たり。乃ち使をして、國都駐在の諸將を趣し、ともに西せむと欲し、謂はしめて曰く、太閤の志は、明を伐つに在り、今すでに平壤を取る、平壤以西は復た支ふるものなし、鴨綠江より、明の北京に至るまで、百餘里に過ぎず。吾の全軍、甲を卷いて、之に趨き、彼をして、備ふるに及ばざらしむれば、以て志を得べし、と。浮田秀家、三奉行等と

李舜臣

謀り、答へて曰く、全羅・江原の二道、未だ定らず、我未だ深く入るべからず。我が水軍、將に全羅を循へ、而して、北、黄海に會せむとす。然る後、水陸並び進まば、是れ萬全の策なり、と。乃ち諸將をして、國都平壤間の諸城を守らしむ。

これより先、我が水軍の將九鬼嘉隆等、全羅道に出づ。全羅水軍節度使李舜臣、勇奮にして、智略あり、艨艟鬪艦、數千艘を以て巨濟洋に泊し、巨煩を以て、我船を擊碎し、來島康親之に死し、脇坂安治苦戰し、その衆を亡うて退く。舜臣、因つて閑山島に屯し、以て我が水軍を拒ぐ。我が水軍、これを以て、陸軍に合する能はず。陸軍亦た後患を懼れて、進む能はず。舜臣の朝鮮に於ける、その功、偉なりといふべし。

朝鮮の援を明に請ふや、使者道に絡繹たり。廷議その國の藩にして、必ず爭ふところに在るを以て、行人を遣し、宣祖に諭すに、興復の大義を以てし、且つ大兵且さに至らむとすと揚言し、又書を琉球・暹羅に下し、我を侵すの勢を爲し、以て秀吉を靡し、海を航して、西北に向ふなからしむ。ずてにして、遼東副總兵祖承訓・遊擊史儒・算等、兵三千を帥ゐて義州に來り、安定館に軍す。行長、銃手をして、之を攻めしめ、儒

明軍の敗

清正、二王子を擒にす

算は死し、承訓わづかに身を挺して免る。中朝震動す。乃ち兵部侍郎應昌をして、備倭軍務を經略し、以て之を救はしむ。

清正の咸鏡道に向ふや、韓克誠を擒にして、會寧府に迫る。この時、世子臨海君琿及び次子順和君・王妃・從臣等と城に在り。府使鞠景仁、二王子を拘らへ、人をして、來つて降を乞はしむ。清正之を許し、宣祖の在るところを推問し、王子等を鏡城に置き、厚く之に供給せしむ。時に王妃・宮女と帛を以て面を覆ひ、竊に城を出づ。我が兵之を捕へむとす。清正戒めて曰く、面を視るなかれ、觸犯するなかれ、と。因つて、知らざるものゝ如くして、飲食を與へ、逃れ去らしむ。韓人、清正の驍勇にして、且つ仁慈なるを仰ぐといふ。

兀良哈

朝鮮國境の北は兀良哈、即ち女眞の遺孽の居るところなり。清正、鞠景仁を嚮導となし、兵八千を率ゐて、その境に入り、城を拔く。曰く、我、胡地に入り、一捷武を耀かす、以て太閤に報ずるに足れり、と。兵を引いて、南に還る、女眞進躡、連戰皆破れ、因つて其武を畏れて復た尾せず。

沈惟敬

宣祖、我が軍の驍勇にして、八道の命旦夕に迫るを以て、急を明に告ぐ、明の兵部尚書石星、計出づるところなく、議して、人を遣して、之を偵せしむ。こゝに於て、嘉興の人沈惟敬、募に應ず。惟敬は、市井の無賴なり。游擊官に拜し、平壤に至り、小西行長と見、佞辯委曲、數條を約し、弭兵を以て、己の功となさむとす。行長曰く、天朝幸に兵を按じて、動かざれ、我亦た久しからずして還るべく、大同江を以て、界となし、平壤以西は、盡く朝鮮に歸さむのみ、と、因つて、之を遣歸せしむ。

この時、韓將沈岱・元豪等、兵を江原道に徵し、京城を復さむことを謀りしが、事成らずして敗る。江原すでに定まり、福島正則の將某、慶州城を守る。時に朝鮮はじめて巨礮を鑄り、震天雷と名づく。夜に乘じて、城に放つや、忽にして、鐵彈四に迸り、震響雷の如く、死傷數百人。某、遂に城を棄てゝ去る。惟敬さきに和の成るを奏せしが、廷議倭の詐にして信じ難きを以て、宋應昌を趣して、兵を進めしむ。時に李如松、寧夏の賊を平らげて、還り、二十年十月、防海禦倭總官に任ぜられ、弟如栢・如梅等と、並に師を率ゐて朝鮮に入り、十二月を以て、軍に至る。明主亦た惟敬をして、我が兵の

平

動靜を伺はしむ。行長、平壤に在り、惟敬の期を過ぎて、なほ來らざるを怒り、軍を進めて遼東に入らむとす。偶ま惟敬至り、兩國和成るをいふ。すでにして、如松の軍に遼東に遇ふ。惟敬曰く、和議すでに成り、日本の兵、將に平壤を撤去し、大同江を以て界となさむことを約す。將軍、軍を行るなきに如かず、と。如松、惟敬の憸邪を叱して、之を斬らむと欲す。參謀李應試曰く、惟敬を藉り、倭を貽き、封じて、陰に之を襲ふ、奇計なり、と。如松以て然りとなし、乃ち惟敬を營に置き、師に誓つて、江を渡る。明年正月、平壤西北の肅寧館に次す。行長、以て封使至るとなし、牙將を遣し、來り迎へしむ。明軍進んで平壤に次す。行長なほ未だ覺らず。風月樓に、竚んで、以て待つ。如松の衆、五萬餘、その將士逡巡して、未だ入らず。形、大に露はる。行長、はじめて惟敬に欺かれしを悔ゐ、陣に登つて拒守す。如松、諸軍をして、之を圍まし、我が兵、素より朝鮮の軍を輕んずるを以て、祖承訓をして、詭つて其裝をなして、西南を攻めしめ、遊擊吳惟忠をして、攻めて牡丹臺を迤らしむ。而して、如松、親ら大軍を提げて、その東南を攻む。軍少しく卻くや、如松先づ退きしものを斬つて徇へ、死士を募り、鉤梯を拔けて直に上る。我が兵、南面の軍を輕んず。而して、承訓等、忽ち裝を卸して、甲を露はす。

碧蹄館の戰

我が軍、大に驚き、急に兵を分つて、捍拒す。如松・如栢等、すでに道を分つて、並び入る。如松の馬、礮に斃れ、馬を易へ、塹を躍つて上り、兵を麾いて、奮ず進む。行長殊死して戰ひ、千六百人を亡ひ、孤軍深く入り、大敵に抗し難きを料り、夜、兵を收めて、大同江を渡り、龍山寨に赴く。黑田長政等、敗を聞いて憤り、行長を迎へ、殿して國都に退く。朝鮮の兵、之を聞いて、所在蜂起して、明軍に應ず。すでにして、如栢開城を復し、失ふところの四道、尋いで復す。明軍すでに連勝、敵を輕んずるの心あり。會ま朝鮮人、我が兵さきに京城を棄てゝ遁れしを告ぐるものあり、如松之を信じ、輕騎を以て馳せ赴く。

時に小早川隆景、開城より國都に赴かむとし、その途上、明軍の先鋒査大受に碧蹄館に遇ひ、立花宗茂とともに擊つて、之を潰走せしむ。すでにして、如松兵十萬餘を以て至る。隆景、衆を勵まして、之を碧蹄館に要擊し、一以て百に當らざるなし。明將楊元來り援く。如松、力を得て、復た進む。隆景奮進、また大に之を破る。如松馬より墜つ。井上某、幾んど之を刺さむとす。如梅來り、井上を射、如松を扶けて逃る。隆景、北ぐるを逐うて臨津に至り、明兵を江に擠し、江水之が爲に流れず。如松痛哭、夜に徹し、退いて開城に駐まり、人を遣して、明に還らしめ、病を以て代を請ふ。隆景、京城に凱旋す。

和議

第二十六章　豐臣秀吉の征韓（下）

こゝに於て、李如松、沈惟敬を宥し、行長に遣し、前議を申ねしむ。行長、疑懼して、決せず。清正その議を排して可かず、行長遂にその辯給を信じ、太閤に報じて、和議を勸む。太閤之を許し、諸將に命じて、諸道の兵を撤せしめ、惟敬、徐一貫等とともに那古耶の行營に來る。太閤乃ち之を引見し、その還るに及び、書を明に贈つて曰く、和親もし僞詐ならざれば、明主の皇女を以て、本邦に納るべく、朝鮮の八道、その四道を我に屬し、四道を以て、李昖に授けむ。而して、李昖は、王子及び大臣一二人を質とすべし、と。遂に行長をして、之を處理せしむ。行長、惟敬等と謀り、太閤の辭命を改め、唯だ明の封冊を望むとなす。明主、封王の議を定め、日本國王の印を鑄り、李定誠・楊方亨を正使となし、惟敬を嚮導として、韓使とともに來らしむ。在韓の諸將、和の成るを聞き、皆戍を置いて釜山に歸る。

封冊を裂く

すでにして、明使等、我が邦に來る。太閤之を伏見に見、朝鮮王子の來朝せざるを責め、僧承兌をして、明の璽書を讀ましめ、爾を封じて日本國王となすといふに至り、大に怒り、封冊を取つて、之を扯裂し、罵つて曰く、吾、日本を掌握す、王たらむと欲せば、自ら王たらむ、何ぞ髯虜の封を待たむ。且つ吾にして王とならば、天朝を如何、と。乃ち行長を召して誚讓し、即夜明使等を逐ひ、再び征討の師を起す。柳川調信、私に朝鮮の使に囑して曰く、太閤の意、すでに決す、速に三道を獻じ、王子をして來り謝せしめよ。然らざれば、貴國復た禍を被らむ、と。惟敬等、なほその虛喝を疑ふ。すでにして、沿道兵を治むるの狀を見、大に驚いて、奔り去る。

石星

こゝに於て、太閤復た那古耶に至り、小早川秀秋、元帥となり、清正行長、先鋒となり、その軍、凡そ十三萬人。釜山を以て、根據の地となし、令を傳へて、先づ士卒の暴掠を禁ず。諸道風を望んで、潰え去る。宣祖、前役に懲り、遽に海州に走り、急を明に告ぐ。方亨の歸るや、罪を惟敬に委し、幷に石星前後の手書を呈す。神宗大に怒り、星を逮し、惟敬等、ともに論死す。星、隆慶の初に當り、建言して杖せられ、直聲天下に震ひ、廢籍より起ち、官に居るに及び、重望あり、然れども、本と書生、素より謀略なく、妄りに奸人を信じ、力めて封貢を主とし、遂に此を以て敗る。こゝに於て、尙書邢玠を以て、薊遼に總督たらしめ、麻貴を改めて備倭大將軍となし、楊鎬を以て僉都御史となし、朝鮮の軍務を經略せしむ。

李舜臣

蔚山の攻圍

行長等諸將、加德・絕影諸島の敵を破り、清正秀家の軍、南原・全州の兵を逐ひ、全羅慶尙を犯し、將に國都に入らむとす。これより先、朝鮮水軍の將李舜臣、奇計を以て、屢ば我が軍を破りしが、元均といふもの、讒を構へて、之を獄に下し、自ら水軍を統ぶるに及び、固より功なし。こゝに至り、宣祖復た舜臣を起して、水軍統制となし、全羅道に入らしむ。舜臣、聲望彰著、その至るや、海道の民、先を爭つて迎投し、軍氣大に振ふ。舜臣、錦島に軍す。我が水軍の別將菅正蔭、二百艘を以て進み、之に碧波亭下に遇ふ。舜臣、船十二隻に大砲を載せ、潮に乘じて來り攻む。正蔭の軍、利あらずして死す。こゝに於て、我が海陸兩軍、復た相通ずるを得ず、因つて功なし

毛利秀元等、進んで國都に逼り、全義館に陣し、清正蔚山を守り、行長順天に駐まる。明將邢玠・楊鎬・麻貴等、進發を議し、分れて三となり、協合して蔚山を攻む。清正、そ

の臣加藤清兵衛を留めて、蔚山を守らしめ、自ら西生浦に赴き、水城を築く。楊鎬等、その虚に乗じて、蔚山を圍む。清正、之を聞き、急に見兵五百を以て、蔚山に入る。楊鎬等、兵を合して、四面仰ぎ攻め、游擊陳寅、連りに島山の二柵を破り、第三柵、拔くに垂んとす。而して、鎬、素より李如梅と善く、時に如梅未だ至らざるを以て、寅の功、如梅の上に出づるを欲せず、遽に金を鳴らして、軍を收め、長圍を築く。清正、淺野幸長等と、巨石大木を投じ、明兵を斃し、之を守ること、自若たり。明軍、我が汲糧の途を絶ち、城中飢渴愈よ甚しく、皆紙を嚙み、壁土を煮、馬血を飲み、馬盡きて溺を飲み、夜、城外に出でゝ、明人の尸を搜ね、その佩ぶるところの糗糧牛炙を取つて、之を食ふ。天大に雪ふり、士卒痛疎指を墜すものあり。清正毫も屈せず、意氣益す壯なり。黑田孝高、梁山に在り、蔚山の急を聞き、人を釜山に馳せて、援軍を出さしむ。諸將電馳して至り、楊鎬等、敗走す。城兵出てゝ諸軍とともに追擊し、大に明兵を殺し、糧仗を委棄して、野に盈つ。すでにして、太閤諸將に諭し、釜山・蔚山・泗川・順天の四屯兵、凡そ十萬を留め、餘は悉く罷め歸り、重ねて指揮を待ちて發せしめむとす。諸將斬獲するところの馘を獻ず、太閤命じて之を　都に埋めしめ、稱して耳塚といふ。

楊鎬

太閤の歿去

蔚山の役、明は海內の全力を傾けて、朝鮮通國の衆と合し、而かも、一旦に委棄し、舉朝嗟恨す。楊鎬すでに奔つて京城に還るや、邢玠とともに、詭つて捷を以て聞す。贊畫主事丁應泰、敗を聞いて、鎬に詣り、後計を咨ふ。鎬、揚揚として、自ら功を伐る。應泰憤り、抗疏して盡く敗狀を列す。乃ち鎬を罷めて、聽勘せしめ、萬世德を以て之に代らしむ。邢玠、前役水兵なきが故に敗れしを以て、乃ち益す江南の水兵を募り、海運を謀り、持久の計をなし、四路に分つて、兵を進む。麻貴伏兵に敗られ、中路の將董一元、亦た潰え、遂に成功なし。

後、幾もなくして、太閤病篤く、將に瞑せむとするや、目を張つて曰く、我が十萬の兵をして、海外の鬼とならしむる勿れ、と。言畢つて薨ず。年六十三。德川家康、遺命を奉じ、淺野幸長・石田三成をして、那古耶に之いて、計を在韓の諸將に傳へ、振旅せしむ。時に明兵來りて、新寨・泗川を襲ふ。島津義弘、その子忠恒とともに、擊つて之を破り、斬首三萬餘級、伏尸二百里。我が軍、糧乏しきを以て、窮追せず、望津に至り、太閤の訃を聞き、潛に諸將に告げて、歸裝を治めしむ。

釜山南海の戰

釜山の軍、秀秋に從つて、先づ對馬に還る。清正・義弘、亦た兵を收めて還り、行長亦た歸らむと欲す。明兵來つて、之を圍む。清正・義弘、とともに返り擊ち、行長を拔いて、皆舟に上らしむ。明の西浦都督陳璘、副將鄧子龍を遣し、水軍千人を督し、三巨艦に駕し、朝鮮の水軍と併せて、我が舟を釜山の南海中に要す。清正、すでに去り、義弘闘つて、且つ卻き、加德島に至る。明兵、行長に四集し、行長士卒を厲まして止り戰ふ。鄧子龍、素より慷慨、所在戰功を立つ。時に年七十を踰え、意氣彌よ厲、首功を得むと欲し、急に壯士三百人を携へ、躍つて朝鮮の舟に上り、直に前んで奮戰す。會ま他舟誤つて、火器を擲ち、子龍の舟に入り、舟中火起るや、我が軍之に乘じ、其兵を塵にして、子龍を斬る。朝鮮の水將李舜臣、來り救ひ、亦た射殺せらる。舜臣忠武絶倫、兵を用ふること神の如く、朝鮮稀に見るところ、八道の民、その死を聞いて、痛哭せざるなく今に沿海之を祠り、蘋藻を薦むるもの絶えず。後、謚して忠武といふ。その文集今存す。我が軍、愈よ奮戰し、明將陳璘を圍み、幾んど之を獲たり。而して、陳蠻・季金・馬文煥等、繼いて至り、銃炮交も發し、盡く我が船を焚く。行長、一島に上り、敵寨（曳橋砦？）を奪つて、之に據る。明の兵艦、環守す。行長、夜に乘じて、ひとり遁れて、義弘に歸す。義弘還つてその餘衆を載せ、陳蠻等と戰ひ、明將陶明宰を擒にして還り、皆加德に至る。劉綎生兵を以て來り攻む。我が軍、擊つて之を卻け、因つて帆を揚げて、盡く去る。明軍復た追躡せず。遂に對馬に達す。尋いで元帥小早川秀秋、諸將とともに伏見に至り、秀頼に謁し、諸老これを勞して、國に就かしむ。時に我が後陽成天皇慶長四年、明の神宗萬曆二十七年、朝鮮に在りては、宣祖即位の三十二年なり。はじめ、豐臣氏、文祿元年、壬辰の歳を以て、兵を出し、一年を隔て甲午の歳を以て、再び師を出だせしを以て、朝鮮の史乘、之を呼んで、壬辰の亂といひ、又は甲午の變といふ。壬辰より已亥に至るまで、凡そ七年、太閤の宿志、遂に成らずと雖も、その結果の東洋史に於けるや、固より大、且つ我が邦の威武を海外に耀かせしもの、その績、亦た大なりといふべし。

壬辰亂後の形勢

明の萬世德、さきに楊鎬に代りて、朝鮮軍務を經略せしも、畏れて敢て前まず。我が兵退きしを聞き、程を乘ねて、馳せて會同に至る。總督邢玠、捷を奏し、丁應泰等、復た諸臣の倭に賂して國を賣るを疏劾す。神宗、將士久しく勞苦せしを以て、內金十

萬兩を發して、師を犒ひ、東征の功を叙して、諸將を賞す。然れども、七年の久しき、師を喪ふこと數十萬、糧を糜することと數百萬、加ふるに、韃靼以外、南疆亦た頗る多事、北邊には新に滿洲の興起するあり、明の社稷、愈よ衰ふ。朝鮮は、亂後亦た頗る疲弊、餓莩道路に充滿し、盜賊四方に横行す。我が邦に於ては、豐臣氏の後、德川氏あり、征韓の役、止むや、使を通じて、和好を約し、兩國これより兵を用ひず、外寇全く熄みしと雖も、宣祖の後、光海君、淫虐暴戾、國勢愈よ振はず、遂に愛親覺羅氏に服屬し、その正朔を奉ずることゝなり、事大の思想は、その後、長しへに變ぜずして今に至る。

日本の外交

征韓役後の日本は、德川氏の鎖國政策によりて、船舶の構造を限り、且つ海外に航するを禁歇せしを以て、臺灣・暹羅等に於て、偉績を留めしもの、二三その人あれども、舉世桃源の夢を貪ること、三百年、長崎の一港を開いて、支那荷蘭の通交を許せしのみ。世界の大勢に關する底の最大活動は、刻下の世に至るまで、全く之なし。

東洋戰術の變革

こゝに特記すべきは、この役の前後に於ける東洋戰術の變革、是れなり。元の西域に通ずるや、煩礮の法を傳へ、襄樊の攻圍、之を以て奇功を奏し、後に我が邦に寇するや、亦た之を用ひ、明に至りても、仍ほ舊に依れり。但し小銃の使用法は、未だ普及せず、間ま之あるも、甚だ進歩せざりしが如く、朝鮮亦た然り。小銃は、我が天文年間、葡萄牙人、之を種子島に傳へ、幾ならずして、海内に行はれしが、この役に先つて、必要上、その使用法を研究し、後、邦人の朝鮮に降りしもの、その製法を傳へしに因り、この役の末には、多少の朝鮮製小銃を軍用となすに至れり。而して、宣祖の孫、仁祖憲文王の第五年、女眞の胡族、龍骨府城を侵すや、朝鮮の守兵、銃砲を以て防戰し、同十五年、仁祖清軍に降り、臣妾の禮を取りたる後、清帝、朝鮮製銃砲の精鋭なるを見て、之を征戰に利用せむと欲し、屢ば銃隊を徵せしことあり。若し夫れ、戰艦に至りては、多年海寇に苦しみたる結果として、その制、大に進歩し、今の謂ゆる甲鐵艦、即ち船體に被らすに鐵を以てすることは、朝鮮に於て、早く發明され、支那の船舶は、元代より、亦た大に觀るべきものあり、その制、むしろ覺かに我に超えたるが如し。然れども、その後は、進歩殆んど之なし。

第二十七章　南疆の騷亂

楊應龍の叛

朝鮮壬辰の亂は、明室に對する一大打擊なり。而して、この間、前には、巴拜寧夏の叛あり、後には播州楊雲龍の寇あり。巴拜は、すでに之を述ぶ。こゝに、楊應龍に就いて述ぶるところなかるべからず。

はじめ、唐の乾符の間、楊端といふものあり、募に應じて、南詔を定め、遂に播州に據り、宋元を經て、皆附屬して、臣と稱し、洪武の初、楊鑑內附して、宣慰使を授けられ、數傳して、應龍に至り、數ば征伐に從ひ、功を恃んで、驕蹇なり。帝の十八年、貴州巡撫葉夢熊・巡按陳效、並に應龍凶惡の諸罪を疏劾す。四川巡撫李化龍、時方に播州の兵を調して、松潘を防禦するを以て、請うて、しばらく勘問を免ず。これに由つて、川貴の巡按、議合はず。應龍性猜很、兵を阻し、殺を嗜み、轉ずるところの五司七姓、悉く畔離す。夢熊、兵を發して、悉く剿せむことを請ひしが、二十年に至り、應龍重慶に赴いて簿に對し、法に坐し、斬に當するや、請うて、二萬金を以て贖ひ、又兵五千を以て倭を剿して、報効せむことを願ふ。詔して、之を釋す。會ま巡撫王繼光、その地に至り、嚴に勘結を提ぐや、應龍抗して出てず。兵を用ふるの議、遂に決す。二十一年、繼光、重慶に至り、總兵劉承嗣とともに三道に分ち、婁山關・白石口に進み、反つて、敗るところ

應龍の死

となり、繼光論ぜられて罷む。二十二年、邢玠を以て總督となし、往いて、之を勘せしむ。應龍、罪を其黨黃元・阿羔に諉し、執らへて獻ずるや、乃ち元羔を重慶に斬る。應龍、四萬金を輸し、以て其罪を贖はむことを請ひ、その次子可棟を重慶に羈し、追贖せしむ。應龍すでに死を免れ、怙惡悛めず。會ま可棟死するや、益す痛恨し、遂に諸苗を糾して反し、草塘・餘慶の二司及び興隆・都匀の諸衛を焚刦し、進んで黃平・重安を圍んで官吏を殺し、大に江津・南川・綦江・合江を掠め、寖く湖廣に及び、勢遂に熾なり。

二十七年、李化龍を以て、川湖貴州軍務を總督せしめ、東征の諸將劉綎・麻貴・陳璘・董一元を調して南征す。六月、應龍、先づ發し、綦江を攻めて、縣令を刦し、盡く城中の人を殺し、屍を投じて江を蔽ひ、水爲に赤し。尋いで、退いて、三溪に屯し、益す九段生苗及び黑腳苗に結んで助となす。すでにして、官堊に屯し、蜀を窺うと聲言し、又東坡爛橋を焚き、楚黔の路梗がり、黃平・龍泉、所在急を告ぐ。賊復た偏橋に據り、出てゝ興隆・鎮遠を掠む。李化龍、議して、勁兵萬餘を置き、要害を據守し、楚黔の道を通じ、益す諸路の兵を調し、以て大舉を俟つ。

すでにして、應龍、兵數萬を勒し、五道並び出てゝ、龍泉司を破る。化龍の徵兵、大に

集るや、乃ち將士を部署し、八道並び進み、每路の兵三萬、化龍自ら中軍に將たり。劉綎禁江より入り、大に賊を破り、婁山關に入り、白石に屯す。應龍、諸苗を率ゐ、死を決して戰ひ、亦た破る。ずてにして、八路の兵、大に海龍囤下に集り、長囤を築き、更番迭に攻め、賊大に困む。化龍、馬孔英をして、兵を勒して、賊の後を攻めしむ。天久雨、將士泥濘中を馳せて苦戰す。綎、士卒に先つて、土城に克つ。應龍、益す迫り、金を散じ、死士を募つて拒戰す。諸苗皆駭散して、應ずる者なし。起つて、刀を提げて、壘を巡り、四面の火光、天を燭し、大兵すでに囤に登つて入るを見るや、應龍倉皇、愛妾二と閤室自縊し、その子朝棟、その弟兆龍等、百餘人、皆擒にせらる。師を出してより、賊を滅ぼすに至るまでを計るに、百十有四日。化龍露布以聞するや、詔して應龍の屍を磔し、朝棟、兆龍等を市に戮し、その地を以て、遵義、平越の二府を置き、川貴に分屬せしむ。

安南の分裂

安南は、嘉靖二十年、都統使司を置きしと雖も、なほ全く靜謐に歸せず。阮淦といふもの、哀牢に奔り、兵を養ひ、銃を蓄へ、前朝黎氏の後を求めて、黎寧といふものを得、立てゝ帝となし、清華州に據りて、恢復を圖る。時に嘉靖二十三年なり。これより後、北には莫登庸の子孫、王たるあり、南には、黎氏あり。登庸、すでに死し、その孫福海、嗣いで立ち、その卒するや、子宏瀛立つ。宏瀛衆を統ぶる能はず。黎寧の臣鄭檢の逐ふところとなる。寧死し、再傳して惟潭に至り、漸く強盛、遂に兵を擧げて、宏瀛の子茂洽を殺し、復た安南に據り、關に款いて貢を求む。總督陳大科、上言す、莫の黎を簒するその事逆、黎の讐を復するその名正。宜しく、その來歸を許すべし、と。詔して、惟潭を以て、都統使となす。これより、安南復た黎氏の有となる。而して、莫氏は、惟だ高平の一郡に據るのみ。宗黨多く海隅に竄處し、時に出でゝ侵し、屢ば邊患をなす。然れども、その後、未だ幾ならず、阮淦の子阮潢は、鄭檢の專權を惡み、西都順化府に據りて、廣南を建つるに至り、安南復た分裂して二となれり。

岳鳳

安南、なほ兵を勞するに至らずと雖も、これより先、緬人の寇は、決して、楊應龍に遜らず。緬甸の莽瑞體、兵を以て、諸蠻を服し、人を遣して、隴川宣撫多士寧を招くや、記室岳鳳、士寧を酖殺し、金牌印符を奪ひ、瑞體の僞命を受け、士寧に代つて、宣撫となる。ずてにして、瑞體死し、子應裏嗣ぐや、萬曆十二年、鳳之を導いて入寇し、騰越、永昌諸處を窺ひ、ずてに順寧を陷る。明將劉綎、鄧子龍、之を攀枝花地に敗り、勝に乘じ

て、追擊し、先後の斬首萬餘。鳳、大に懼れ、遂に降る。時に諸部蠻、鳳を視て向背を爲し、緬亦た鳳に倚つて、心腹となす。こゝに於て、諸部ともに緬使を殺して、來り歸す。綖、兵を率ゐて、緬に進み、直に國都阿瓦に至る。應裏退き走る。阿瓦の酋猛勺、綖に詣つて降る。猛勺は、應裏の從父なり。遂に師を班へし、俘を期に獻じ、鳳は誅に伏す。

然れども、未だ幾ならずして、緬甸復た熾に、進んで、孟養蠻莫に據るや。明軍擊つて、之を退く。巡撫陳用賓、八關を騰衝に築き、兵を列して戍守し、人を募つて暹羅に至らしめ、緬を夾攻せむことを約す。緬、暹羅の困むところとなり、勢頓に衰ふ。然れども、近緬諸部、仍ほ之に服屬し、明の世を終るまで、復する能はず。

第二十八章　東林の黨議

明の神宗即位の十一年、張居正卒し、その翌十一年五月、清の太祖高皇帝、兵を起して、尼堪外蘭克圖倫城を征し、清室興隆の基を啓き、四十四年に至りて、元を建てゝ、天命といふ。その詳は、後に說くところあるべく、こゝには、明末の外寇に續いて、內訌の愈よ盛なるを叙すべし。

神宗の皇嗣

はじめ太祖、匹夫より起りて、天下を統一し、蒙古族を驅除し、衆望を求めむと欲するや、宋の餘風を學び、言路を開放し、時務を論ずるの自由を公許し、之に加ふるに、胡居仁・王守仁の學、大に行はれ、理義の說を主張するもの多く、英宗以後、權臣政を擅にし、閹豎私を爲すを見るや、競うて國事を可否し、處士橫議するもの、少からず。神宗の世、王皇后、子なく、鄭貴妃、殊寵あり、子常洵を生み、因つて、皇貴妃に進封す。これより先、王恭妃、皇長子常洛を生みすでに五歲なれども、封を益さず。中外籍々として、帝の將に愛を立てむとするを疑ふ。給事中姜應麟、首に抗疏して元嗣を立てゝ東宮となさむを請ひ、廣昌典史に貶せられ、大學士申時行、同列を率ゐて、再び儲を建てむことを請うて、聽かれず。後、詔を下し、諸曹の建言、止だ所司職掌に及ばしめ、その長に擇んで、之を獻ずるを聽るし、專達を得ざらしむ。こゝに於て、言者蠭起、皆宮闈を指斥し、執政を攻擊す、帝概して不問に置く。こゝに於て、門戶の禍、大に起る。

顧憲成

萬曆二十二年、吏部郎中顧憲成、亦た此事を以て、上疏力爭して、籍を削らるゝや、その鄉無錫に歸る。憲成、すでに廢せられ、名益す高し。その地、故と東林書院あり、宋

の楊時、道を講ずる處たり。常州知府歐陽東鳳等、之が爲に營構し、憲成、弟允成と之を倡修し、同志高攀龍・錢一本・薛應敎・史孟麟・子孔兼等諸人と、學を其中に講ず。海內風を聞いて景附し、往々時政を諷議し、人物を裁量し、朝士之を慕ひ、亦た遙に相應和す。これに由つて、東林の名、大に著はれて、忌むもの、亦た多し。憲成かつて言ふ、聳穀に官するも、志、君父に在らず、封疆に官するも、志、民生に在らず、水邊林下に居るも、志、世道に在らざれば、君子取るなし。故に講習の餘、必ず時事に及ぶ、と。後卒に此を以て、世の口實となる。その後、鄒元標は、京師に在り、首善書院を立てゝ學を講じ。趙南星、考功郎中を罷めて歸り、相繼いで、學を講じ、自ら氣節を負ひ、政府と相抗す。これを東林黨議の濫觴となす。

時に言路互に相詆訐し、帝心に之を厭ひ、章悉く中に留む。三十七年、御史鄒繼芳、力めて給事中王元翰の貪婪不法を攻む。元翰、亦た繼芳を疏詆し、二人に左右するもの、復た相角して已まず。時相葉向高、盡く諸疏を下し、部院大臣に勅して、曲直を評し、その論議顚倒するもの、一二人を罪し、その餘を警めむことを請ふ。報ぜず。諸臣すでに曲直見るところなく、益す黨を樹てゝ相攻むずでにして元翰遂に朝を

李三才

孫丕揚

辭して去る。その翌三十九年、巡撫鳳陽都御史李三才、輔臣の缺けたるに因つて、外僚に參用せられむとするや、忌むもの多く、喬應申等十餘人、之を劾し、議論一時に喧然たり。顧憲成、方に學を東林に講じ、三才と素より相善きを以て、書を葉向高及び吏部尙書孫丕揚に貽り、盛に三才の廉直を稱し、御史吳亮、亦た之に和す。然れども、三才自ら請うて、罷め去る。こゝに於て、先に元翰を右けしもの、亦た往々にして三才を扶け、議論なほ已まず。

廷臣黨勢、日に盛なり。はじめ國子祭酒湯賓尹、諭德顧天埈と、各朋徒を收召して、時政に干預し、宣崑黨といふ。皆賓尹・天埈居るところの縣を以て、之を目す。而して、言路又齊楚浙の三黨あり。齊は丁詩敎・周永春・韓浚・張延登、之が魁となり、燕人趙興邦の輩、之に附き、楚は官應震・吳亮嗣・田生金、之が魁となり、蜀人田甫・徐紹吉の輩、之に附き、浙は姚宗文・劉廷元、之が魁となり、商周祚・毛一鷺・過庭訓等、之に附き、三黨相合し、宣崑黨とともに聲勢相倚り、東林を攻め、已に異なるを排するを以て事となす。葉向高、群情を調停せむことを謀り、却つて、東林の黨魁と稱せらる。三十九年、大に京官を計るに當り、孫丕揚、主となり、湯賓尹・劉國縉等を黜け、又喬應申を外に出

すや、諸の失意の者、相繼いて、丕楊等を攻む。而して、丕楊亦た顧憲成・趙南星・鄒元標・高攀龍等を薦めしが、用ひられず。すでにして、去志あり、堅臥して出てず。明年遂に拜疏して歸り、葉向高、亦た病と稱す。

葉向高

時に帝怠荒益す甚しく、二十餘年、未だ嘗て一たびも大臣を接見せず。曹署多く空しく、內閣は止だ葉向高、しかも門を杜づることすでに久しく、六卿は惟だ刑部尚書趙煥一人のみ、又兼ねて兵部に署し、四十年改めて吏部兵部尚書に署せらる。煥、素より請望あり、朝臣に于いて左右するところなく、顧るに、雅に東林と善からず。故に諸黨人、東林を攻むるもの、間に乘じて、之に入り、擧措するところ、往々にして、清議に協はず。四十一年九月に至り、又劾せられて罷む。四十二年八月に至り、葉向高、又罷む。向高、宿望を以て、相位に居り、事ごとに執爭して、忠盡を效し、帝心に之を重んず。而かも、その言、多く格して用ひられず。救正するところ、十に二三のみ。かつて、疾に臥するや、閣中人なく、章奏その家に就いて擬旨するもの一月、後堅臥して、出てざるや、家に即いて擬旨すること、前の如く、論者以て體に非ずとなす。癸丑

黨人の盛

福王常洵

會試に主たるに及び、章奏皆閣中に送り、尤も異事となす。累疏引退すれば、輙ち優旨して慰留す。こゝに至りて、疏四十餘、上詞極めて哀、はじめて其去るを允ざる。

すでにして、吏部詔を奉じて、廢人を起すや、李朴亦た其中に在り。黨人大に譁いて、之を攻め、朴亦た上疏して、黨人を論ず。時に李三才、家居す、忌むもの、その復た用ひられむことを慮りて、之を劾す。三才、亦た東林の爲に辨じ、遂に落職す。この時、黨人の勢、愈よ盛にして、悉く正人を斥け、後進の當に入つて諫官たるべきものは、必ず門下に鉤致して、羽翼となし、又大に京官を計るに及び、一時黨人と趣を異にするものは、盡く貶黜せらる。方從哲、相たるに及び、黨人事を用ひ、朝に正人なく、中外缺官日に多く、上下解體す。而かも、黨禍は、明の社稷と終始せり。

東林の黨議に次いで生じたるは、有名なる三大案にして、ともに宮闈の內訌、愈よ甚しきを證するものなり。

第二十九章　明末の三大案

はじめ、萬曆二十九年、庶長子常洛、年二十、沈一貫等、堅く請うて、力爭し、遂に立て

て皇太子となす。同日、諸王を封じ、鄭貴妃の出常洵は、福王となる。然れども、帝の寵、衰へず。京に在ること、十餘年、その婚費三十萬、洛陽の邸第を營むや、二十八萬に至り、常制に十倍す。又官店を崇文門外に設け、福邸に供す。府第成るに及び、廷臣王の藩に之くを請ふもの、數十百奏、報ぜず。四十一年に至り、廷臣復た交章して、力請す。帝、明春を以て、期となし、すでにして、忽ち旨を傳へ、莊田四萬頃に非ざれば、行かずといふ。廷臣大に駭く。會ま錦衣百戸王日乾、鄭貴妃の內侍姜麗山等、厭勝の術を用ひて、皇太后皇太子を詛咒し、福王を擁立せむとするを訐告す。葉向高、帝に勸め、福王をして、藩に就かしめ、以て群疑を息む。その行くや、歷年稅使・礦使進むるところの珍奇贏羨、悉く以て之に資し、莊田二萬頃を賜ふ。中州腴土、足らず、山東湖廣の田を取つて、之に益す。王又奏して、淮鹽數千引を、洛陽に開市せむことを乞ふ。中州舊と河東鹽を食ふ、淮鹽を改食するを以て、河東引過して、行はれず、邊餉此に由つて大に絀く。

その翌四十三年五月四日、爲ち一男子あり、東宮に闖入し、梃を以て、守門を掊倒す、內侍呼集して、之を執らふ、太子親奏、部に下して、鞫す。犯者、名は張差、もとより瘋

疾あり語言顚倒、倫次なく、遂に瘋癲を以て、獄を具ふ。時に帝、東宮を待つこと、甚だ薄く、中外、鄭貴妃がその弟國泰とともに、太子を危うせむことを謀るを疑ふ。こゝに至りて、擧朝驚駭す。刑部主事王之寀、重ねて、訐問を加へ、詞、內監劉成・龐保に連る。皆鄭貴妃の近侍なり。こゝに於て、廷臣交章して、成保等を鞫治し、主使を窮究せむことを請ふ。給事中何士晉、直に國泰を攻め、且つ貴妃を侵す。帝心動き、貴妃を諭して、善計を爲せといふ。貴妃窘んで、哀を皇太子に乞ひ、自ら他なきを明かにす。太子事の貴妃に逆るを以て、大に懼れ、帝に請うて、速に獄を具へ、株連することなからしむ。越えて數日、帝、慈寧宮に幸し、低座を聖母の靈次に設け、太子御座の右に侍坐し、三皇孫、階下に雁立し、內侍をして、急に百官に宣し、進見せしむ。帝曰く、昨、瘋癲張差といふものあり、東宮に突入す、これ異事、朕に於て、何ぞ與らむ、外庭許多の間說あり、乃ち我が父子を離間せむと欲するか、と。又太子に問うて曰く、汝、何の話かある、と。太子云ふ、かくの如き瘋癲の人は、決了して便ち罷まむ、必ずしも株連せず、と。因つて、群臣に語つて曰く、我が父子、何等の親愛、外庭許多の議論を添ふ、爾輩不忠の臣となり、我をして、不孝の子たらしむ、殊に恨むべしとなす、と。帝復た東宮の語

を以て、大聲百官に宣示す。時に御史劉光復、激切揚言して曰く、陛下極めて慈愛、太子極めて仁孝、と。班稍や後れて、聲高きに因り、帝之を聞くこと甚だ悉くさず、誤つて、爭ふところありとなし、大に怒り、中涓に下して、拏下せしむ。中涓、帝の旨を承けて、梃杖交も加へ、遂に光復を獄に下す。こゝに於て、張差を市に磔し、成保を內廷に掠死し、王之寀の官を罷め、何士晉を外に補し、その餘、無辜に波及するを得ず、事遂に寢む。すでにして、光復を獄に釋す。謂ゆる梃擊の案、即ち是れなり。

紅丸の案

神宗在位四十八年、清軍愈よ南下、朝鮮警を告ぐるの際、脾を病んで崩ず。太子常洛即位す。これを光宗となす。詔して、廢官を起し、抗言して罪を得、降戍謫戍永錮して身を沒せしもの、皆赦さる。葉向高、復た閣に入つて、首輔となる。帝、位に即いて數日、疾あり、大醫藥を進めて効なし。はじめ、鄭貴妃、神宗の疾に侍して、乾清宮に留居し、帝の位に即くに及びて、未だ移らず。帝が前の福王の事を以て、己を銜まむことを懼れ、珠玉及び美姬八人を進めて、帝に嗾はしめ、選侍李氏、最も帝の寵を得たるを知り、因つて、立てゝ皇后となさむことを請ひ、選侍も亦た貴妃の爲に皇太后に封ぜむことを求む。帝、疾を力めて、門に御し、趣かに冊封の禮を擧げしむ。禮部侍郎孫如游等、力爭し、事寢むを得たり。時に都下紛言す、貴妃、內侍崔文昇をして、洩藥を進めしめ、帝、これに由つて、委頓す、と。群情疑駭す。外家王郭の二戚、畹、遍ねく朝士に謁し、泣いて、宮禁危急の狀を愬へ、鄭李の交、甚だ固く、禍心を包藏すといふ。こゝに於て、給事中楊漣、御史左光斗、朝に昌言し、吏部尙書周嘉謨と大義を以て、貴妃の兄の子鄭養性を責め、貴妃を趣して、宮を移さしむ。貴妃恐れて、慈寧に移居す。二十九日、帝の疾、大漸するや、閣臣方從哲等を乾清宮に召見し、命じて、選侍を封じて、皇貴妃となす。選侍、皇長子を趣して出て、后に封ぜむと欲すと曰はしむ。帝應ぜず。群臣愕然たり。從哲、鴻臚寺丞李可灼に命じて、藥を進めしむ。可灼自ら仙方といふ、謂ゆる紅丸なるものなり。帝服し訖つて、忠臣と稱するもの、再たび、諸臣退くや、可灼復た一丸を進む。明日帝崩ず。在位わづかに三旬。選侍、心腹の閹魏進忠、とともに皇長子を挾んで、自ら重うせむことを謀る。群臣入つて臨むや、閹人の侍するところとなる。楊漣厲聲、之を責め、入臨禮の如くするを得たり。劉一燝、皇長子の在るところを問ふ。群閹應ぜず。一燝大言す、誰か敢か新天子を匿すものぞ、と。東宮伴讀王安、入

移宮の案

つて曰く、選侍、皇長子を抱いて出づ、と。漣乃ち追及し、掖して輦に升り、文華殿に至る。群臣叩頭して、萬歳と呼び、日を擇んで、登極す。漣、左光斗等と言ふ、皇長子、嫡母生母なし、選侍かつて封后を邀ふるも、冲主を以て付託すべきに非ざるなり、と。こゝに於て、議して、選侍をして、移つて噦鸞宮に居らしむ。皇長子位に即く、名は田校、これを熹宗となす。紅丸、移宮は梃杖に次ぐの二案にして、之を合せて三大案といふ。

三大案と熹議

こゝに於て、東林黨は、李可灼の罪を論じ、非東林黨は、その惡意なきを證して、不問に置かむとし、又東林黨、移宮の一案を以て、執政の權略宜しきを得たるを賛し、非東林黨は禮を先朝の妃嬪に失するを詆議し、之に加ふるに、王之寀の如きは、更に梃杖の前案を追理せむとし、三案並び起り、時論騒然たり。御史賈繼春は、李選侍を安んぜむことを請ひ、左光斗、之に反し、繼春因つて切責せられ、後、籍を削らる。禮部尚書孫愼行等は、方從哲が李可灼をして、紅丸を進めしめし罪を追論し、從哲遂に罷む。こゝに於て、葉向高、相となり、劉一燝とともに、東林黨を起用し、趙南星を吏部尚書となすや、南星主として、選佚を擧げ、盡く敵黨を斥く、敵黨、依つて復仇を圖り、宦官魏忠賢と結托して、互に紛爭するに至れり。その間、兩黨の形勢、一起一倒、弊政百出、外は清室の興起南侵に遭ひ、内は流賊の猖獗を極むるに際し、その後四十年にして、明室遂に亡ぶに至る。

第三十章　魏忠賢の專横

魏忠賢の出身

魏忠賢、初名は進忠、少にして無頼、馬射を善くし、尤も博を好む。かつて、悍少年と博して、勝たず。苦むところとなるや、恚つて自ら宮し、遂に内廷に入り、諸監と博し、益す窘乏す。之に久うして、はじめて、貧緣し、熹宗の母王才人の典膳となり、魏朝に因つて、王安に結ぶ。朝、さきに帝の乳母客氏と私す。進忠入るに及び、亦た通ず。客氏遂に朝を薄くして、進忠を愛し、兩人遂に相結ぶ。帝の位を嗣ぐや、進忠客氏、寵あり。進忠に世蔭を賜ひ、名を忠賢と改め、客氏を封じて、奉聖夫人となす。時に前太監王安、諸大臣と同じく顧命を受け、忠賢の權を專にするを見、重く之を懲らさむと欲す。忠賢之を覺り、客氏と謀り、詔を矯めて、安を殺す。安、すでに死して、忠賢益す憚るところなし。忠賢文義に闇く、乃ち舊の司禮監李永貞を取つて、入つて賛畫に備へ、李明道、崔光昇等、各監局を司り、帝の意を探つて奸をなし、凡そ宮壼内侍、魏客と協

はざるもの、百計之を殺し、忠賢と衷申して出入す。帝性機巧を好み、斧鋸椎鑿髹漆の事を親らす。引繩削墨する毎に、忠賢輙ち事を奏す。帝之を厭ひ、謬つて曰く、朕すでに悉くす、汝輩好く之を爲せ、と。忠賢因つて威福を擅にするを得たり。御史王心一・馬鳴起等、先後之を糾す、帝、怒つて、降調差あり。

客氏の虐恐

天啓三年七月、客氏魏忠賢、宮中の人、その惡を白せむことを恐れ、旨を矯めて、光宗の選侍趙氏に自盡を賜ひ、裕妃張氏を別宮に出し、その飲食を絶つ、天雨ふるや、妃匍匐し、檐溜を承け、之を飲んで死す。皇后張氏、數ば帝前に於て、客魏の過失を刺る。この年、后娠むあり、客氏計を以て、之を墮す。帝、これを用つて嗣に乏し。又帝の郊祀の日を以て、帝の寵するところの馮貴人を掩殺す。左右敢て言ふものなし。范慧妃、讒を以て寵を失ひ、李成妃之が爲に憐を乞ふや、客魏之を知つて、亦た成妃を別宮に幽す。妃、豫め食物を簷瓦の間に儲へ、半月死せず。斥けて宮人となす。

忠賢の專權

時に東林の勢盛にして、韓續・鄭三俊・李邦華・高攀龍並に通顯楊漣・左光斗・魏大中・袁化中等、激揚諷議す。忠賢頗る之を憚り、外事に於ては、敢て大に肆にせず。忠賢出づる毎に、車馬儀衛、僭して乘輿に擬し、東廠に提督し、許顯純を用ひて、鎮撫司理刑となし、鍛錬殘酷、士大夫、多く戕死せらる。

朝臣の廢黜

四年六月、左副都御史楊漣、忠賢の二十四大罪を劾す。忠賢大に懼れ、遂に帝の前に趨つて、泣訴し、且つ東廠を辭す。而して、客氏傍より剖析し、王體乾等、之を贊す。帝、瞥然として辨ぜず。遂に溫諭して、忠賢を留め、次日漣の疏を下して、嚴責す。漣、愈よ憤り、對仗して、復た之を劾せむとす。忠賢詢ひ知り、帝を過めて、朝に臨ましめざること三日。帝の出づるに及び、群閹數百人、甲を衷し、陛を夾んで立ち、左班官に勅して、事を奏するを得ざらしむ。漣、乃ち止む。こゝに於て、諸臣愈よ憤り、上疏するもの、凡そ七十餘人に下らず。帝、溫旨して、悉く忠賢の勤勞を數へ、群臣の附和を責む。魏廣微は、縉紳の名を錄し、邪黨となして、忠賢に呈す。こゝに於て、工部郎中萬燝は杖殺せられ、大學士葉向高・吏部尚書趙南星・左都御史高攀龍は罷め、吏部侍郎陳于廷・副都御史楊漣・僉都御史左光斗は籍を削られ、首輔韓續・朱國榛、又罷む。

五年正月、崔呈秀、御史となる。これより先、呈秀の淮陽を按ずるや、攀龍、その贓私を發し、趙南星、議して、之を戍せしむ。呈秀、窘んで、夜、忠賢の所に走り、叩頭して乞う

東林黨の敗

て養子となり、涕泣して、南星・攀龍の輩、皆東林の邪黨なるを言ふ。時に忠賢、廷臣の爲に変も攻められ、因つて、事端を假りて、正士を傾陷せむことを思ひ、呈秀を得るや、相見るの晩きを恨み、遂に用ひて腹心となし、日に與に計畫し、其官を復し、二歳を越えて、兵部尚書兼左都御史に進み、出入烜赫、勢、朝野を傾け、陰に己に異なるものを排し、汪文賢の疑獄に乘じ、楊漣・魏大中・左光斗・吳懷賢等を獄に下し、ともに、獄中に死す。御史惠世揚・夏之令・刑部侍郎朱世守・大理寺丞楊一鵬・兵部侍郎劉策等、並に魏客を論ぜしを以て、籍を削られ、尚書孫愼行等數人、亦た此の如く、願憲成以下、數人を列して、東林の奸黨となし、悉く黨人の名を刊して、天下に示す。こゝに於て、群小並び進み、善類爲に一空。

六年十月、魏忠賢の爵を上公に進め、又その生祠を西湖に建つ。浙江巡撫潘汝貞の請に從ふなり。詔して、祠額を賜ひ、石に勒して、功德を記し、閣臣文を撰んで、冊に書す。祠に入つて拜せざるを以て、籍を削つて論死するものあり。忠賢の從子良卿は、寧國公に封ぜられ、從孫鵬翼は、安平伯となりて、少師を加へられ、從子良棟は、東安侯となりて、太子太保を加へられ、その後、良卿は太師を加ふ。良棟・鵬翼、尙ほ襁褓

忠賢除かる

に在り、而して、良卿天子に代つて南郊に享し太廟を祭るに至る。こゝに於て、天下皆忠賢が神器を竊まむと欲するを知る。

七年八月、帝崩ず。嗣なし。遺詔して、皇五弟信王由檢を立つ。これを毅宗莊烈帝となす。帝素より忠賢の惡を知り、深く自ら儆備す。位に即くに及び、その黨、自ら危む、楊所修・楊維垣、先づ崔呈秀を劾し、以て帝を試む。呈秀罷めて歸る。こゝに於て、主事陸澄源・錢元慤・員外史躬盛、遂に交章して、並に忠賢を劾じ、而して嘉興の貢生錢嘉徵、更に忠賢の十大罪を劾す。疏上るや、帝、忠賢を召し、內侍をして、之を讀ましむ。忠賢、震恐魄を喪ふ。仍つて忠賢を鳳陽に安置し、その罪を榜して、天下に示し、尋いで錦衣衛に命じて、逮治せしむ。忠賢行いて阜城に至りて、之を聞き、その黨李朝欽とともに縊死す。乃ち其屍を磔し、首を河間に懸く。呈秀、忠賢の死を聞き、亦た自ら縊り、明年その屍を追戮す。

客氏を籍す

熹宗崩ずるや、客氏外宅に出づ。こゝに及び、詔して、浣衣局に赴いて、掠死せしめ、その家を籍す。良卿・國興、客光先等と、皆棄市せられ、家屬少長となく皆斬る。嬰孩市

東林黨の敗

て養子となり、涕泣して、南星・燁龍の輩、皆東林の邪黨なるを言ふ。時に忠賢、廷臣の爲に交も攻められ、因つて、事端を假りて、正士を傾陷せむことを思ひ、星秀を得るや、相見るの晩きを恨み、遂に用ひて腹心となし、日に與に計畫し、其官を復し、二歲を越えて、兵部尚書兼左都御史に進み、出入烜赫、勢、朝野を傾け、陰に己に異なるものを排し、汪文賢の疑獄に乘じ、楊漣・魏大中・左光斗・吳懷賢等を獄に下し、ともに、獄中に死す。御史惠世揚・夏之令・刑部侍郎朱世守・大理寺丞楊一鵬・兵部侍郎劉策等、並に魏客を論ぜしを以て、籍を削られ、尚書孫愼行等數人、亦た此の如く、顧憲成以下、數人を列して、東林の奸黨となし、悉く黨人の名を刊して、天下に示す。こゝに於て、群小並び進み、善類爲に一空。

六年十月、魏忠賢の爵を上公に進め、又その生祠を西湖に建つ。浙江巡撫潘汝貞の請に從ふなり。詔して、祠額を賜ひ、石に勒して、功德を記し、閣臣文を撰んで、冊に書す。祠に入つて拜せざるを以て、籍を削つて論死するものあり。忠賢の從子良卿は、寧國公に封ぜられ、從孫鵬翼は、安平伯となりて、少師を加へられ、從子良棟は、東安侯となりて、太子太保を加へられ、その後、良卿は太師を加ふ。良棟・鵬翼、尚ほ樞裸に在り、而して、良卿天子に代つて南郊に享し太廟を祭るに至る。こゝに於て、天下皆忠賢が神器を竊まむと欲するを知る。

忠賢除かる

七年八月、帝崩ず。嗣なし。遺詔して、皇五弟信王由檢を立つ。これを毅宗莊烈帝となす。帝素より忠賢の惡を知り、深く自ら儆備す。位に即くに及び、その黨、自ら危む、楊所修・楊維垣、先づ崔呈秀を劾し、以て帝を試む。呈秀罷めて歸る。こゝに於て、主事陸澄源・錢元慤・員外史躬盛、遂に交章して、並に忠賢を劾し、而して嘉興の貢生錢嘉徵、更に忠賢の十大罪を劾す。疏上るや、帝、忠賢を召し、內侍をして、之を讀ましむ。忠賢、震恐魄を喪ふ。仍つて忠賢を鳳陽に安置し、その罪を榜して、天下に示し、尋いで錦衣衛に命じて、逮治せしむ。忠賢行いて阜城に至りて、之を聞き、その黨李朝欽とともに縊死す。乃ち其屍を磔し、首を河間に懸く。呈秀、忠賢の死を聞き、亦た自ら縊り、明年その屍を追戮す。

客氏を誅す

熹宗崩ずるや、客氏外宅に出づ。こゝに及び、詔して、浣衣局に赴いて、掠死せしめ、その家を籍す。良卿・國興・客光先等と、皆棄市せられ、家屬少長となく皆斬る。嬰孩市

に赴き、昏睡未だ醒めざるものあり、人以て慘毒の報となし、之を快とせざるなし。客氏の籍せらるゝに方てや、その家に於て、宮女八人を得たり。蓋し將に呂不韋の爲せしところに効はむとするなり。帝大に怒り、命じて、悉く之を笞殺せしむ。

奸黨、すでに除かれしと雖も、時すでに晩し。外には滿州の勢大なるあり、內には流賊の蜂起するあり、明室の末運、終に回すべからず。

第三十一章　流賊の蜂起

流賊の亂は、毅宗の世、はじめて起りしに非ずして、熹宗即位の初すでに之あり。

遼餉增を發す

天啓元年、四川永寧の土司奢崇明の反するあり、その翌二年二月、貴州水西の土司安邦彥の反するあり、皆邊會、釁を窺ふものに外ならず。而して、白蓮教匪の內地に起るに及ぶや、四方忽ち干戈の警を聞く、猶ほ黃巾一たび起り、漢室亡びしがごとく、實に明末流賊の倡首たり。

紅巾の賊

はじめ薊州の人王森、妖狐異香を得て、白蓮教を唱へ、自ら聞香教主と稱す。その徒大小傳頭及び會主の諸號あり、畿輔・山東・山西・河南及び陝西・四川に蔓延す。後森、

有司に捕へられ、獄に死す。その子好賢及び鉅野の徐鴻儒、武邑の于宏志等、その教を踵ぎ、徒黨益す衆し。時に清兵すでに南下し、遼東盡く失ひ、四方の奸民逞うせむことを思ひ、鴻儒等と約し、この年中秋、並に兵を擧げむとす。會ま謀洩るゝや、鴻儒遂に期に先つて叛し、自ら中興福烈帝と號し、大成興勝元年と稱し、紅巾を用ひて識となし、遂に鄆城を陷れ、俄に復た鄆滕嶧の三縣を陷る。時に承平日久しく、郡縣守備なく、山東故と重兵を置かず、巡撫趙彥、民兵を發して、之を捕ふ。賊支ふる能はず、遂に奔る。官軍その後に尾して、之を追ひ、賊の精銳を嶧縣に殲し、遂に鄆を圍み、大小數十戰、別に滕縣を下し、長圍を築いて、之を困む。賊食盡き、その黨、出でゝ降る。鴻儒、乘騎走つて捕へられ、京師に送つて、之を磔す。鴻儒、刑に臨み嘆じて曰く、我、王好賢父子と經營二十年、徒黨三百萬に下らず、事の成らざるは、天なり、と。鴻儒事を擧げてより、凡そ七月にして滅ぶ。鴻儒の未だ滅びざる時に方つて、于宏志、亦た兵を武邑に起して、之に應ぜしが、諸生葉廷珍の獲るところとなり、王好賢、亦た捕へられて、誅に伏す。趙彥、功を以て、兵部尚書を加へられ、その餘、秩を進むること差あり。

奢氏の叛

遼匪の亂、直に平らぐと雖も、奢安は未だし。奢氏は、もと猓猓種にして、洪武中歸附し、命ぜられて宣撫となり、世、その土を守る。數傳して、崇明に至り、逆志あり、亡命を招納す。時に邊事急なるを以て、四方の兵を徵す、崇明兵を以て、重慶に至る。巡撫徐古求、その老弱を汰し、餉復た繼がず、遂に城に據つて叛し、蜀土震動す。すでにして、崇明、可求を殺し、瀘州・遵義・新都・內江を陷れ、進んで成都を圍む。布政使朱燮元・周著等、門を分つて、固守す。石砫の女土司秦良玉、兵を發して、成都を援け、圍遂に解け、二年夏、重慶を復す。時に水西宣慰使安堯臣死し、子位幼なり、位の母奢社輝は、奢崇明の女弟なり。その族子邦彥、素より異志を懷き、崇明と合す。崇明の反するに及び、或はその己に成都を陷れしを傳ふ。二年六月、邦彥、遂に位を挾んで叛し、崇明の聲援をなし、自ら羅甸大王と稱し、興方・松林等を陷れ、普安・安南等を圍む。雲南都司李夫常、兵を帥ゐて、之を救ひ、伏に遇ひ、全軍皆沒す。こゝに於て、交・曲靖・武定・尋甸・崇明の間、騷　として、兵に苦む。

すでにして、崇明は布政使朱燮元に破られ、成都の圍を衝いて走り、邦彥貴陽を

蜀中の平定

拔く能はずして遁る。次いで、三年五月に至り、燮元、四川總督となり、諸軍を會して、遵義を復し、遂に進んで、永寧に克ち、賊衆二萬を降す、奢崇明父子窮蹙し、餘衆を率ゐて、安邦彥に投じ、與に兵を合して、復た遵義を犯す。官軍又之を敗り、崇明の妻及び女弟を擒にし、蜀中遂に靖なり。未だ幾ならずして、貴州巡撫王三善、邦彥に襲はれて死し、崇明の勢、復た振ふ。而して、燮元、永寧を拔き、龍場に入り、征討數年、莊烈帝の崇禎二年に至り、雲南の兵を檄して、烏撒に下り、四川の兵は永寧を出て、畢節に下り、而して自ら大軍を率ゐて、陸廣に駐まり、大方に逼る。貴州總兵許成名、永寧より、赤水を復す。邦彥、崇明と衆十餘萬を合して、來り攻む。燮元、成名と合し、伴り退いて、賊を誘ひ、兵を三路に遣して、その巢を擣く。四川總兵侯良柱、賊に永寧に遇ひ、成名と合擊して、大に之を破り、崇明・邦彥を斬り、數千人を俘にし、積年の巨寇、はじめて靖し。

遼匪及び西南の諸蠻の蜂起は、皆北邊滿州の警あるに因り、明室愈よ多事なるを以て、其釁に乘せしものに外ならず。而して、莊烈帝の位に即くや、袁崇煥を擧げ

て、師を薊遼に督せしむ。崇煥、將略あり。兵に長ず。こゝに於て、滿州の太宗は、その鋭を避けて、朝鮮に向ひ、明室一時安からむとせしが、忽ち流賊の群起するあり、國祚遂に危し。

明室の財政困苦を告ぐること、すでに久し。世宗の時、御史林潤、奏して曰く、天下の財賦歲供、京師は米四百萬石、而して各藩の祿米は八百五十三萬石に至る。即ち災傷蠲免なるも、亦た祿米の半を供するに足らず、年復た一年、將に何を以て支へむとする、と。封建の餘弊、藩王支庶蕃衍して、此の如きに至るなり。こゝに於て、歲祿を減じ、宮嬪を限るの制を設けしと雖も、之を防遏するに足らず。嘉靖以後、倭寇に加ふるに、朝鮮の警を以てし、北には滿州人の南下を計るあり、西南二境、亦た數ば兵を動かす。內帑一空、資途支へず。故に神宗は、百方府庫の充盈を謀り、頻りに新稅を課して、之を補足せむと欲し、鹽監・珠監・礦監・稅監等を各地に設け、一切の業務、皆稅を課し、貨物を密藏するものは、違禁の罰を受く。官吏縱橫、絡繹之を探り、以て商民を誣ゐ、賄を得ざれば財を沒入し、或は人を殺すに至る。こゝに於て、國中ひそかに亂を思ふものあり。これより先、閹黨喬應甲、陝西に巡撫し、朱童蒙、延綏に巡撫し、

明室の財政

陝西の諸賊

皆貪墨にして、民を恤まず。連歲大に饑ゆ。白水の賊王二・府谷の賊王嘉允・宜川の賊王左掛等、一時並に起り、城堡を埋めて、官吏を殺す。安塞の馬賊高迎祥、自ら闖王と稱し、饑民王大梁、自ら大梁王と稱し、衆を聚めて、之に應じ、三邊の饑軍、亦た群起して盜を爲す。大吏賊を聞くを惡んで曰く、これ饑氓、徐に自ら定まらむのみ、と。帝、國用の足らざるを憂ひ、給事中劉懋の議に從つて、驛站の冗卒を裁す。山陝の游民、驛糈を仰ぐもの、食を得るところなく、皆賊に從ふ。

こゝに於て左副都御史楊鶴を以て、三邊軍務を總督せしめ、流賊を捕ふ。王二・王大梁等、すでに斬られ、賊渠多く誅に就くと雖も、鶴、撫綏する能はず。繼いで起るもの、盜す衆く、延安・榆林の間、隨處皆賊。陝西五鎭の兵、入り援くるや、延綏の兵は、中道より逃れ歸り、甘肅の兵は、譁して誅を懼れ、皆賊に合す。賊首王嘉胤、延安慶陽を掠めて、府谷を陷れ、神一元は、寧塞を破つて、之に據る。延安の賊張獻忠は、もと膚施縣柳樹澗の人、かつて軍に從つて、延綏總兵王威の麾下に在り、法を犯して、斬に當るや、他將陳洪範、その狀貌を奇とし、請うて之を釋し、すでにして、逃れ去る。こゝに於て、又衆を聚めて、十八寨に據り、八大王と稱す。

張獻忠

李自成

張宗衡

四年六月、副總兵曹文詔、賊を河曲に敗る。これより先、王嘉胤、久しく河曲に據りしが、文詔その餉道を斷つて、之を困む。嘉胤遁れ走り、その左右の殺すところとなる。その黨王自用、紫金梁と號するものを推して、首となす。自用、群賊老獪獪曹操・八金剛・搭地王・射塌天・閻正虎・滿天星・破甲錐・邢紅狼・蝎子塊・混世王等及び高迎祥・張獻忠に結び、皆山西に聚る。而して、上天龍・過天星、亦た來り會し、ともに三十六營、二十餘萬、米脂の人、李自成は、迎祥の甥なり、世、李繼遷の寨に居り、幼にして、羊を牧し、長じて驛夫に充てられ、騎射を善くす。麗狠無賴、數ば法を犯す。知縣晏子賓、將に死に置かむとするや、脫し去つて、屠となる。こゝに於て、兄の子過と往いて之に依り、闖將と號し、獻忠等と合す。

曹文詔、左光先等と宜君・清澗・米脂・合水の賊を分勦し、皆大に捷つ。文詔、陝に在つて、大小數十戰、功最も多く、巡撫范復粹、功狀を上る。兵部洪承疇の格するところとなり、賞行はれず。關中の賊、稍や盡くと雖も、山西は愈よ甚しく、賊將高迎祥・羅汝才・張獻忠等、道を分つて四出し、大寧・隰州・澤州・壽陽の諸州縣を陷れ、全省震動す。部議、宣大總督張宗衡をして、平陽に駐まり、巡撫許鼎臣をして、汾州に駐まり、地を分つて、之を分守せしむ。すでにして、李昇・賀人龍・艾萬年、關中の兵に將として至る。鼎臣撤して、自ら從ふ。宗衡、その己に從はざるを怒り、之を撤して、還らしむ。三將適從するなく、賊、間に乘じて磨盤山に據り、出て、交城・文水・澤州・遼州・西順を陷る。

流賊の跳梁

車箱峽

六年二月、流賊、畿南・河北を犯せしが、總兵曹文詔の爲に敗らる。その十一月、賊盡く河北に集り、屢ば諸將に敗られしを以て、乃ち詭辭して、降を乞ふ。監軍內臣楊朝進、之を信じ、爲に入つて奏す。會ま天寒くして冰合す。賊乃ち河を渡つて南す。河南の軍、之を扼するものなく、遂に澠池・伊陽・盧氏を陷る。巡撫元默、軍を督して、之を禦ぐ。賊、間道より、內鄉に入り、大に南陽・汝寧を掠め、直に湖廣に走る。はじめ、賊の陝西に起るや、高迎祥最も強く、李自成これに屬す。河を渡るに及び、自成別に一軍となる。

七年六月、賊、鄖陽・商南を犯す。總督陳奇瑜、陝西・河南・湖廣の兵に檄し、擊つて、大に之を破り、その魁數人を擒にす。張獻忠・商雒に奔り、高迎祥・李自成等、悉く遁れて、興安州の車箱峽に入る。峽は四山巉立、中亘四十里、入るに易くして、出づるに難し。賊、

誤つて其中に入る。山上の居民、石を下して擊ち、或は投ずるに炬火を以てし、且つ石を用ひて、その口を塞ぐ。路絶えて、食を得るところなく、困しむ甚し。又大に雨ふること二旬、弓矢盡く脱し、馬芻に乏しく死するもの過半。自成急に其黨顧君恩の謀を用ひ、重賓を以て、奇瑜の左右及び諸將帥に賂し、僞つて降を請ふ。奇瑜、意、賊を輕んじ、驕る色あり、遂に遽かに之を許し、先後三萬六千餘人を籍し、悉く遣して、歸農せしめ、百人ごとに一安撫官を以て、之を護し、過ぐるところの州縣に檄して、糗糧を具へて、傳送せしむ。賊はじめて峽を出て、即ち大に譟ぎ、盡く安撫五十餘人を殺し、過ぐるところの七州縣を屠り、略陽の賊數萬、亦た來り會し、關中大に震ふ。

洪承疇

十一月、陳奇瑜を逮して獄に下し、洪承疇を以て、之に代らしむ。賊、陝西に集まるもの二十餘萬、高迎祥・李自成・韋昌平・涼臨洮鳳翔の諸府數十州縣を歸し、隴州を圍むこと、四十餘日。承疇、兵を遣して擊ち、大に之を破る。會ま朝廷、豫・楚・晉・蜀の兵に命じ、四道より陝に入らしむ。迎祥・自成、遂に竄して、終南山に入り、すでにして、東、靈寶・汜水・滎陽を陷る。賊、每營數萬、糧に因つて宿飽し、人に副馬あり、官兵寡くして備多く、餽餉繼がず、且つ馬少し。總兵左良玉、懷慶に在り、督師巡撫と議合はず、檄調時に應ぜず。帝、洪承疇に命じ、關を出てゝ、急に剿し、六月を限つて、賊を平げしむ。

潁州陷る

賊、承疇の關を出てしを聞き、大に滎陽に會し、老獪獪曹操・革裏眼・左金王・改世王・射塌天・横天王・混十萬・過天星・九條龍・順天王及び高迎祥・張獻忠、ともに、十三家七十二營、官軍に敵せむことを議して、未だ決せず。李自成、進んで曰く、匹夫なほ奮ふ、況んや、十萬の衆をや。官兵能く爲すなきなり。宜しく分ち定むべく、向ふところの利鈍は、之を天に聽かせむ、と。こゝに於て、兵を分つて、ともに東に掠め、霍邱先づ陷り、潁州之に繼ぎ、知州尹夢鰲・通判趙士寛以下、官紳士庶、難に殉するもの、ともに百三人。城中の婦人、節に殉するもの、二十七人。烈女八人。一時の忠烈、ひとり盛なりと稱せられ、城破るゝ後、亦た一人の賊に向つて、憐を乞ふものなく、賊怒つて、遂に之を屠る。賊進んで、鳳陽を陷れ、皇陵を焚き、大に焚掠を肆にす。留守朱國相等、戰死す。この時、賊の慘毒、舉げて言ふべからず。人の夫と父とを縛して、その妻女を淫し、然る後に、之を殺し、或は孕婦の腹を割き、男女の胎を驗し、或は大鍋を以て、油を煮、孩子を内に擲ち、その跳躍を觀て、樂となすものあるに至る。

はじめ、洪承疇の關を出て、信陽に至るや、諸將畢く會す。賊、河南の兵盛なるを見、六月路を分つて、陝西に奔り還る。張獻忠、英霍より路を麻城に取つて、陝に入り、高迎祥・李自成に鳳翔に會し、官軍と遇ひ、副將艾萬年・柳國鎮等、戰歿す。總兵官曹文詔、憤ること甚しく、三千人を以て大に戰ひ、斬首五百、逃ぐるを追ふこと三十里、賊數萬騎を伏せて、合圍す。文詔、徒步して轉鬪し、遊擊平安等二十餘人と皆死す。賊勝に乘じて城を掠む。承疇、力めて之を涇陽三原の間に遮る。文詔、忠勇時に冠たり、良將第一と稱せらる。その死後、賊中爲に相慶す。帝之を聞いて、深く痛悼をなす。清朝に至り、謚を賜うて忠果といふ。

曹文詔の死

高迎祥の死

流賊すでに蔓延して、天下に半し、洪承疇、一人願る能はず。こゝに於て、盧象昇を以て、兵部侍郎に進め、山西陝西の軍務を總理せしむ。すでにして、承疇賊を渭南に敗り、象昇は滁州を救ひ、高迎祥と大に朱龍橋に戰ひ、賊、連營ともに潰え、西、踏德に入り、道を分つて、南陽裕州を犯すや、象昇又擊つて之を敗り、賊の精銳、幾んど盡く。九年七月に至り、孫傳庭、洪承疇に代りて、巡撫となり、銳意に賊を滅し、副將賀人龍等とともに、賊首高迎祥を盤屋に擊つて、之を擒にし、俘を闕下に獻じて、磔死す。賊黨乃ちともに李自成を推して闖王となす。

その翌十年十月、李自成蜀中の空虛を窺ひ、間に乘じて、寧羌を陷れ、七盤關を破り、三道に分れて、蜀に入る。總兵管侯良忠、之を綿州に禦いて、戰死す。遂に諸州縣を連陷し、進んで、成都に逼る。洪承疇、兵を引いて來り援くや、自成乃ち洮州より番地に入る。官軍轉戰千里、甲を解かざるもの二十七晝夜、自成殘卒を引いて、岷州に竄入す。その翌十一年九月、自成復た蜀を犯さむことを謀り、馬科・賀人龍、之を拒ぐ。乃ち漢中に走りて、左光先の据するところとなり、その黨皆降り、惟だ自成東に遁る。洪承疇、伏を潼關の南原に設け、大に之を破る。自成妻女ともに失ひ、數騎を從へて、商洛に遁る。これより先、副將孫應元等、連りに賊を鄭州に破り、賊、江北を犯さむとするや、應元等、その前を扼し、復た之を敗り、賊渠劉國能・馬士秀、先後熊文燦に詣つて降り、張獻忠、又左良玉の敗るところとなり、亦た降を乞ふ。良玉、その詐を知り、急に之を擊たむことを請ふ。文燦聽かずして、之を受く。

流賊の大敗

賊勢再び盛なり

十二月に至り、清兵すでに畿輔の城數十を陷れ、轉戰して、山西に入るや、討賊の

討賊の師

諸將、急に軍を引いて、還つて京師に入衛す。張獻忠、穀城に在り、兵を擁して、餉を索め、日に劫奪を掠にす。こゝに至りて、復た叛き、穀城を毀ち、房縣を陷る。左良玉等、追うて、羅猴山に至り、伏に遇うて、大に敗る。時に李自成、亦た出でゝ、餘衆を收め、往いて獻忠に依る。賊勢こゝに於て、復た熾んなり。

明末清初の形勢

流賊の亂をなすや、諸將之を防ぎ、時に剿滅に歸せむとせしことあり、李自成の車箱峽に於ける、張獻忠の穀城に於ける如き、即ち是れなり。而して、之を追擊して、賊首を梟するに及ばず、逡巡の間、窮鼠却つて猫を噛み、その禍、遂に救ふべからざるに至る。獻忠自成の再び叛してより四年、賊兵遂に京城を陷れ、帝自經して崩じ、四海亂麻の如く、すでに明室なきに至る。故に論者之を以て明室の亡因となし、陳奇瑜・熊文燦の僞欺に罹りし愚を咎め、之を以て罪首となすと雖も、滿州の勢、次第に盛にして、南下の聲、日に逼りしもの、更に緊切なるを忘るべからず。

之を要するに、莊烈の世、明室すでに亡ぶといふも可、その存するは、殘骸のみ。こゝに於て、清室の天下統一は、實に今後の東洋史を形成するものに外ならず。予は、次に筆を滿州の起原及び清室の興起に着け、漸次遞下して、世變を概說すべし。

▲東洋通史第十一卷目次▼

(續刊豫告)

第四編　歐人東漸時代

(四)清の初世

第三二章　滿洲の興起と太祖の建業
第三三章　朝鮮の服屬
第三四章　漠南蒙古との關係
第三五章　明の滅亡(上)
第三六章　明の滅亡(下)
第三七章　三鎮藩の叛亂
第三八章　臺灣の鄭氏
第三九章　清室の官制及び兵制

(五)清の盛世及び疆外經略

第四〇章　露人中央亞細亞侵略の端緒
第四一章　準噶爾部の跋扈
第四二章　準噶爾部の平定
第四三章　南疆の剿治
第四四章　東南亞細亞の形勢
第四五章　高宗の文治

(六)英人の東漸

第四六章　莫臥兒帝國の盛衰
第四七章　印度に於ける英佛二國
第四八章　英人の印度南洋經略
第四九章　清國各地の叛亂
第五〇章　鴉片戰爭
(外數章)

明治三十七年九月廿二日印刷
明治三十七年九月廿五日發行

隔月一回出版　全部二ヶ年ニテ完成ス
全部十二冊　和本綴　總紙數三千六百頁
定價一冊金五拾錢　六冊前金貳圓七拾錢
全部十二冊前金五圓　郵税一冊八錢

著作權所有

著者　久保得二

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

文學士學文漢科專攻 久保天隨先生編述

四書新釋

全部六冊大判和本綴
總紙數二千百五十餘頁
全部割引金貳圓貳拾錢

先秦時代の聖經經傳古今の註疏紛然雜出その多きに堪へざるも絶て當時の社會狀態を顧みず私見を逞ふし新說を出さんを力むるも馬を指して鹿となす愚に陷りしを知らざるのみ解釋を一に歸するは學者の責任にして現時の急務なり天隨先生之を以て世に稱せらるゝと雖も其の本領は更に文那古文學の研究にあり本書は氏が如上の見を以て聖門第一の教科たる四書に就て之れが新釋を試みられし者にして引證該博議論周匝其要を提げ其玄を鉤す其奬勉たりといふべく其勞多しといふへし

四書新釋 **大學** 全一冊 正價金拾五錢 郵稅四錢

四書新釋 **中庸** 全一冊 正價金貳拾錢 郵稅六錢

四書新釋 **論語** 全二冊 正價各四拾錢 郵稅各八錢

四書新釋 **孟子** 全二冊 正價各六拾錢 郵稅各拾錢

文章軌範精義

正編全部三冊大判和本綴
總紙數一千百七十頁
全部正價金壹圓貳拾錢

▲正編上、中、下三冊 一冊正價金四拾錢 郵稅八錢宛▼

文章軌範の世に行はるゝや、既に久しく、子弟之を誦習せざる者あらず、本書は元と、彼士科舉に應ずる者の爲に、特に評選せしに過ぎざれども、戰國の末より、宋末に至るまで、文章風格變遷の大略を領知し得べく、千古に傳へて不朽なるもの亦た怪しむに足らず、而して古今の註釋、紛然雜出、其多きに堪へずと雖も、徒に無用なる文法を說いて其他に及ばず、因襲の餘に出でしもの比々として是なり、天隨氏義に四書新釋を著はし、次いで諸子に及ぼんとせしが、刻下の時勢に感ずるところありて特に此書の刻を以て之を敍述し、周匝明白、一字を增減すべからず、就中字義の解釋と故事の引證とは、一氏にして始めて能くすべきものなり、初學者は猶ほ先づ本書を机上に備へざるべからず。

文章軌範の世に行はるゝや、既に久しく、子弟之を誦習せざる者あらず、本書は元と、彼士科舉に應ずる者の爲に、特に評選せしに過ぎざれども、戰國の末より、宋末に至るまで、文章風格變遷の大略を領知し得べく、千古に傳へて不朽なるもの亦た怪しむに足らず、而して古今の註釋、紛然雜出、其多きに堪へずと雖も、徒に無用なる文法を說いて其他に及ばず、因襲の餘に出でしもの比々として是なり、天隨氏義に四書新釋を著はし、次いで諸子に及ぼんとせしが、刻下の時勢に感ずるところありて特に此書の刻を以て之を敍述し、周匝明白、一字を增減すべからず、就中字義の解釋と故事の引證とは、一氏にして始めて能くすべきものなり、初學者は猶ほ先づ本書を机上に備へざるべからず。

文學科大學長 井上文學博士序文 木村鷹太郎先生著（下卷近刊）

東洋倫理學史

全二冊 洋裝大判背皮金字入
上卷正價貳圓八拾錢
小包送四百匁

東洋倫理學史の著は世界上本書を以て嚆矢とす、此書は著者數年間苦心研究の餘に成れるものにして、敍述詳密、引用正確、著眼卓絶、抑む所の評論は銳利にして議論は大膽、而も條理整然たり、今其上卷の梗概を擧ぐれば先づ◎緒言＝倫理學に對する各方面よりの觀察及解說◎支那之部には＝○伏羲より周公に至る迄の諸聖賢○天に就ての觀念○周末倫理學說＝管子を初め傳、學說＝社會及道德、人性論、德行的能量、政治と道德、八觀、ザラツストラ教に對比す、結論、老子、孔子、子思、(墨子)楊子、列子、莊子、孟子、荀子、商子、韓非子、李斯及秦始皇帝等の傳記及學說を揭け其主義、方法、當時の事情、各說の反目乖離等を布衍解剖して精敍細論其蘊奧を極め○易の倫理學思想なる標榜の下に「按範的法則の客觀的存在＝倫理の根本」人倫の起始＝「賞利主義」「善惡應報の度量」「提要」に則ちて其本體を抉出品騭し○附錄として「倫理學は實踐學に非ず」等、章を分つ十有五、目を立つる無慮數百、反復精緻を極む、

在大學院文學士史學專攻 阪本健一先生著

世界史

全二冊 洋裝大判背皮金字入美本
上卷四版出來下卷既製
總紙數二千五百餘頁

▲上卷正價金壹圓六拾錢小包送四百匁＝下卷正價金貳圓小包送六百匁▼

世界史上の幾江流は宛轉曲折茲に數千載輓近に至りて悉く會滙し怒濤狂瀾今や天下を捲く是れ豈古來未曾有の大史局にあらずや此時に當り天下の極東に國して新に振興の運に際會せる國民は東西古今の往史に鑑みて世界潮勢の來路を研めざるを得ず此書上下兩卷通して三千頁撰んで精、述べて密世界東西の隆否を通敍して餘蘊なし世の史學に想を傾くるの士は邦文世界史中に其精細なる編著を求めば必ず先づ本書を採らざるべからざるなり

法學士原田豐次郎君著

最近外交史

特製本洋布上綴　正價金五拾五錢　郵稅拾錢
大判洋裝並綴　正價金四拾錢　郵稅八錢

第一章　維納列國會議
第二章　神聖同盟
第三章　反動時代
第四章　希臘國の獨立
第五章　クリミヤ戰爭
第六章　伊太利統一
第七章　普佛戰爭
第八章　普墺戰爭、露土戰爭
第九章　伯林列國會議
第十章　三國同盟
第十一章　露佛同盟
第十二章　中央亞細亞問題
第十三章　西米戰爭の合衆國
第十四章　獨逸殖民政策
第十五章　歐洲國際の新局面
第十六章　日清戰爭
第十七章　日清戰後の韓國問題
第十八章　日清戰後の清國問題
第十九章　最近絕東問題
第二十章　巴奈馬獨立事情
附錄

本書は筆を維納列國會議に起して、三國同盟に至り、米西戰爭後の米合衆國及び獨逸の殖民政策を叙し、再轉して絕東問題に移り、最近の日露抗爭事件に及び、尙ほ餘勢は延ひて以て巴奈馬地峽獨立事情に及べり、最も繁雜紛淆を極めたる最近百年間の外交狀態は網羅し盡して掌を指すが如く明なり、目下外交多難の際、我島帝國の人民は必ず一讀するを忘るべからず。

法學士森山守次君著

政治史

特製本洋布上綴　正價金五拾五錢　郵稅拾錢
大判洋裝並綴　正價金四拾錢　郵稅八錢

●維也納會議
●神聖同盟
●希臘獨立
●英國憲法の改正
●佛國七月の革命
●七月革命の影響
●佛國二月革命
●クリミヤ戰爭
●伊太利統一
●シユレスウヰッヒ、ホルスタイン事件
●西班牙問題
●波蘭問題
●墨西哥事件
●普墺戰爭
●普佛戰爭
●露土戰爭
●十九世紀末後に於ける諸國の動靜

近時我邦史學の研究頻に勃興し、其書牛に汗し、棟に充つ、然も政治的活動を論じて天下の治亂興廢の因て來る所を明にしたるもの少し、森山法學士夙に茲に志あり、遂に本書を成す、先づ筆を十九世紀に起し、專ら力を最近政史に用ひ、事實の精確と議論の明晰とを期すると大なり、天下の政治家たるもの、豈に一本を坐右に備へずして可ならんや

法學士須崎芳三郎君著

露國侵略史

特製本洋布上綴　正價金五拾五錢　郵稅拾錢
大判洋裝並綴　正價金四拾錢　郵稅八錢

緒論
第一章　露國小史
第二章　西比利亞の掠取
第三章　黑龍地方の橫奪
第四章　中央亞細亞の掠取
第五章　波斯の侵略
第六章　土耳其の侵略、巴爾幹問題
第七章　西比利亞鐵道
第八章　滿洲問題
第九章　結論

露國の過去三百年間は侵略の歷史なり　西比利亞、中央亞細亞、高加索、波斯、巴爾幹等其方面極めて多し一々其跡を尋ねて滿洲問題を馳致したる所以を示すは本書の目的なり　而して其の間に露人殘虐の實例あり、外交不信義の歷史あり、外交官の惡辣手段、邊疆武官の狡策間諜の奪計等露國の慣用手段は亞出曆見して讀者をして不知不識の間に自から露國對清韓兩國に用ゐたる奸謀の外交を想起せしむ記事は眞面目にして事實を記するに止め批評を讀者の意見に任せたり別に露國小史ありて露國建國の始より現帝ニコラス二世に至るまでの略史を敍せたるを以て讀者は露國の歷史を知り得べし

文學博士高山林次郎君著（第九版）

世界文明史

特製本洋布上綴　正價金五拾五錢　郵稅拾錢
大判洋裝並綴　正價金四拾錢　郵稅八錢

序論　文明史とは何ぞや
第一編　非文明的人類
第一章　原始人
第二章　自然民族
第二編　東洋の文明
第一章　總說
第二章　『ツラン』人種
第三章　『アールヤ』人種
第四章　『ハム』人種
第五章　『セム』人種
第六章　古代四洋人文に及ぼせる東洋人文の勢力
第三編　歐羅巴
第一章　希臘
第二章　古代羅馬
第三章　羅馬帝國と基督教
第四章　民族大移動と歐羅巴の人種
第五章　ビサンツ帝國
第六章　中世
第七章　亞利比亞と十字軍
第八章　文藝復興と宗教革命
第九章　近世

文明史は人類生活の統一的歷史なり是によりて始めて歷史的發達の精神を釋了し、史的發展の眞精神を會得するを得べきなり本書筆を有史以前の民族に起し、佛蘭西大革命に至るまで、主として哲學、宗教、文藝、政治の上より東西歷史の隱微を描破せむと擬す、志士須らく本書を繙讀して、世界文明の潮勢を達觀し、以て方今の實際に推到すべきなり

東京帝國大學法科大學教授 法學博士小野塚喜平次先生著

政治學大綱

（大判全二冊）

總クロース金文字入 特製頗美本

三百五十頁

正價一冊金五拾錢

郵稅一冊八錢

▲上卷目次▼

第一編 緒論
第一章 學
第一節 學の定義
第二節 學の範圍
第三節 學の分類
第二章 政治學
第一節 政治學の定義
第二節 政治學の範圍
第三節 政治學の重要
第四節 政治學の困難
第五節 政治學の可能
第二編 國家原論
第一章 國家の性質
第一節 國家の性質に關する諸學說
第二節 國家の性質に關する論說
第三節 國家の分類
第二章 國家
第一節 總說
第二節 國家的分類
第三節 政體的分類
第三章 國家の發生盛衰及消滅
第一節 國家の發生
第二節 國家の盛衰及消滅

▲下卷目次▼

第三編 政策原論
第一部 政策前論
第一章 國家存在の理由
第一節 問題の意義
第二節 問題の必要
第二節 問題解決の性質
第三節 問題解決の目的
第四節 國家問題の意義
第二章 國家問題の解決
第一節 問題の意義
第二節 政治及び政策
第三章 政策
第一節 政策の前提
第二節 理想政策及び現實政策
第三節 政策本論
第二部 政策機關
第一章 國家機關の權力
第一節 統一機關
第二節 國家機關の分科
第三節 執政機關
第四節 監督機關
第五節 國民
第二章 國民典論
第一節 內治政策
第二節 改良政策
第三章 內治政策
第一節 平民政策
第二節 自由政策
第三節 合理的社會政策
第四節 差別政策
第五節 外交政策
第四章 外交政策
第一節 國家政策
第二節 殖民政策
第三節 膨脹政策
第四節 平和政策
第五節 世界政策

近時人口に膾炙し國家社會國體政體政策內閣議會立憲制等の諸語頗なり然れども其明確なる觀念に至りては之れを有する者甚だ鮮少なり是れ主として政治學の發達尚幼稚にして世に未だ其の出版なきによれり我帝國の如き立憲制の始逸にある國民に於ては殊に其者の必要あるを見る著者濃に大學院にありて斯學を專攻し又官命を奉じて歐洲に留學すること數年歸來東京帝國大學に於て政治學講座を擔任し數輪を執らるゝの傍ら世に斯學の其類なきを慨し遂に其大要を著はし以て識者をして健全なる政治思想を養はしめらる既述簡明懇到近時其比を見ざるの良書なり諸子一本を机上に備へられよ